

Ⅱ部 WAM 助成取り組みの報告

1. 3 団体の概要紹介

NPO 法人 多文化共生教育ネットワークかながわ (ME-net)

～外国につながる子どもたちの教育を支援し、
その子どもたちと周囲の人たちがともに生きられる社会を実現するために

【団体紹介】

「外国につながる子どもたちの前に立ちはだかる高校進学
の壁を何とかしたい！」それが ME-net の活動の原点で
した。1995 年に始まった「日本語を母語としない人たちの
ための高校進学ガイダンス」は、現在神奈川県教育委員
会との協働事業として、県内 6 か所において、各地域の支
援団体と連携して行われています。しかし、「進学ガイダ
ンス開催だけでは、外国につながる子どもたちの抱える課
題に応えられない、恒常的な相談の場が必要である」との
反省から 2003 年「かながわ外国人教育相談」がはじまり
ました。



ガイダンスでの情報提供や相談を受け、高校進学を果た
したものの、退学する生徒が多いことが分かりました。そこで、これを何とかしなければと県
教育委員会との協働事業として「多文化教育コーディネーター派遣事業」を開始しました。こ
うした活動の中で、母国の中学校を卒業して来日するなど、日本の中学校に在籍せず、高校進
学を目指す生徒たちの存在を知り、彼らの学びの場を保障するために「たぶんかフリースク
ールよこはま」を設立しました。さらに最近、「多文化教育コーディネーター派遣事業」の現場で、
日本語や教科支援に加えて、進路支援の必要性が痛感されるようになってきており、今年度か
ら、定時制 5 校における日本人生徒も含めた包括的な「就職弱者の若者へのキャリア支援事業」
を始めました。このように私共の活動は、子どもたちに寄り添い、できるだけ切れ目のない支
援を続けて見守っていきたいと願う中で広がってきたものです。また、当初から教育相談や若
者交流にも取り組みながら、「外国につながる子ども支援のためのネットワーク会議」という
形で、見えてきた課題を県の行政機関や関係支援団体と共有し、少しずつ環境が整うことを信
じて続けてきた活動でもあります。

【たぶんかフリースクールよこはま】

進学ガイダンスや教育相談を通して、神奈川県内の「国際教室」担当者や、他の外国人支援

団体とも連携を進める中、「学齢超過のため中学校に入れない」「出身国で中学校を卒業してきたが、高校受検に向けて学ぶ場がない」という相談が持ち込まれるようになり、その都度相談者の近くの支援団体を紹介していました。しかし、既存の「日本語学校」や「学習塾」は「日本語を母語としない子ども」の日本語と教科指導、さらに面接指導など高校受検に対応できるプログラムを提供していないと思えました。また



ボランティアによる「学習教室」では、量的に十分な学習を保障することは難しいということで、高校受検に対応する学習教室「たぶんかフリースクールよこはま」を立ち上げました。

このような経緯を経て、2009年9月「たぶんかフリースクールよこはま(以下フリースクール)」を開校し、「日本語を母語としない子ども」の高校受検のための「学びの場」を保障し、同年配の子どもたちの「居場所」を提供する場、日本の学校生活への「橋渡し」となることを目指しました。具体的には入試に対応できる日本語力、教科の力をつけることに最も力を注ぎ、さらに母語によるカウンセリングを同時に行い、子どもたちの抱える状況を理解することに努めました。同時に実践的な日本語を学び、子ども同士の交流を深めるために、校外授業や地域の行事にも参加してきました。

2018年度で10年を迎えるフリースクールで勉強した生徒は200人を超えました。ほぼ全員を高校に送っています。対象は外国につながる9年の教育を終了した子ども、あるいは中学の夜間学級に通っている生徒です。週3日、10時から16時半まで、数学・英語・国語(日本語)の授業があります。フリースクールで勉強している生徒たちの背景は様々ですが、共通しているのは、親の都合で連れてこられた子どもたちです。中には、自分が日本にいる現実を受けとめられない生徒も少なからず存在します。日本語だけでなく、数学や英語の学習も充分でない子どももいます。また長い間親子が離れて暮らしていたため、疎外感を感じたり、親との信頼関係ができていなかったりする子どももいます。緊張した面持ちで入学した子どもが同じ境遇の仲間に出て、笑顔を取り戻し学んでいる姿を見るのは、支援している私たちにとって大きな喜びです。

フリースクールは、単なる高校へのバイパスではなく、外国につながる生徒の希望や期待を再生する場所です。そのための進路支援・カウンセリング・日本語指導・教科指導の具体的な目標と方法が求められています。そして、これら4つがうまく融和することで、生徒たちの日本語学習が実り多いものとなると考えています。

私たちは、彼ら一人一人が出身国で学び、培ってきた文化・習慣・価値観などを大事にしつ

つ、異文化の日本社会で自分の立ち位置を見つけて欲しいと願っています。

【拡大する事業と今後の課題】

ME-net ではこのように、一つの事業を続けていく中で表出した新たな課題を解決するために、さらに新しい事業を立ち上げてきました。同時に、「かながわボランティア活動推進基金 21」とその後の「ボランティア団体等と県との協働の推進に関する条例」に基づく協働事業では神奈川の行政機関との連携が強化されました。また、ME-net は、外国につながる子どもたちの教育を支援し、その子どもたちと周囲の人たちが共に生きられる社会を実現するという理念のもとに活動しています。彼らが日本社会で、様々な障害によって不利益を被ることのないように、その時々課題を浮き彫りにし、その解決を目指すために各事業を展開してきました。このように必要に迫られ事業を拡大してきた組織ですが、助成金に頼って活動しているのが現状です。自立した資金を確保し、安定した支援活動につなげることが大きな課題です。



社会福祉法人 青丘社

川崎における外国につながる子ども & 多文化家族支援

～外国につながる子ども & 経済的に困難な子どもの「生活支援」を視座に入れた
学習支援・居場所づくり事業～

1. 1980 年代初め、青丘社の実践～差別と貧困の中で

今から 30 数年前、青丘社が行っていた桜本学園中学生部には、家庭や学校、社会のどこにも「行き場」が見出せない子どもが多く集まっていた。戦後から当時まで、地元中学で力の強い、いわゆる「番長グループ」は、在日韓国・朝鮮人、日本国籍のダブルの在日の子ども、母子家庭など貧困に苦しむ日本人の子どもたちだった。彼らは、差別や貧困状況が生み出す貧しい生活の中、「朝鮮人が勉強したって何になる！」「自分たちが勉強したって、どうせ将来の夢は見えない」と『荒れた行動』を繰り返していた。

そんな彼らと出会った日本人や在日のボランティアが、夜の街で彼らを追い、高校に行くために勉強しよう、将来の夢を考えようと働きかけていた。やがて中学生たちは席につき、公立高校に進学した。しかし、経済苦は変わらず、高校中退も続出。ふれあい館前史、青丘社学習サポートの原点は「追いかけ」「話し合い」「寄り添う」実践の繰り返しだった。

2. 川崎市ふれあい館設立

1980年代から、青丘社はこうした差別状況を変えるため、教育や活動の場の保障を求める市民運動をすすめ、川崎市との話し合いを積み重ねていった。1986年、関東地方初の「在日外国人教育基本方針」が制定され、1988年＜統合施設＞川崎市ふれあい館・桜本こども文化センターが設立された。ふれあい館は川崎市が設置、社会福祉法人青丘社が運営するようになった。



青丘社が受託運営する川崎市ふれあい館は「日本人と在日外国人が相互にふれあい、差別をなくし、共に生きる地域社会の創造（川崎市ふれあい館条例）」を基本理念とし、児童館と社会教育事業を行っている。また、館は乳幼児から高齢者までの世代間連携事業をすすめ、子ども事業、日本語識字学級等社会教育事業、高齢者サークル、障がい者福祉など「地域コミュニティー福祉」事業の中心を担っている。そして、「地域のだれもが力いっぱい生きていくために」常に社会的弱者～マイノリティの人びとに視点を据え、それぞれの個別課題とニーズを担う事業に取り組んできた。

3. 川崎区～増加する多文化家族

川崎市の住民総数は2016年12月現在、1,489,477人で、外国人総数は35,099人、全体の2.3%である。また、川崎区の外国人総数は13,065人で、全市の外国人総数の37.2%を占め、全市で最も外国人が集住している行政区である。上位5ヶ国の国籍は、1位中国、2位韓国・朝鮮、3位フィリピン、4位ベトナム、5位インドとなっている。そして、川崎区の住民総数は226,497人、外国人13,065人で、外国人の住民総数割合は5.7%もの高率を占め、20人に1人を占める。

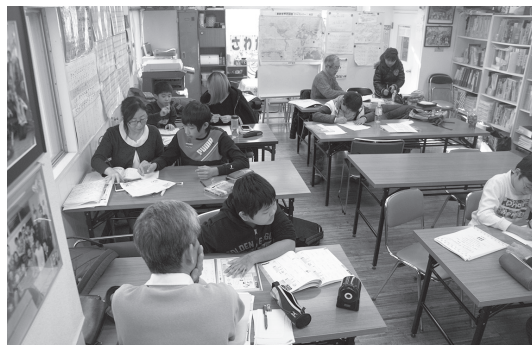
こうした外国人の多くを占める、国際結婚で渡日したフィリピンやタイの女性や、日系ブラジル、ペルー人等は、臨海部の24時間稼働のお弁当工場、冷凍食肉工場、産業廃棄物のリサイクル工場等で、大勢働いている。また、駅前の繁華街に、長時間労働で働く中国人調理師も急増している。そして、それら外国人労働者の子どもたち、家族が川崎区に生活し、日本国籍の家族（日本人と外国人の間に出生した子どもは日本国籍）を含め、多文化家族が増加している。

4. 外国につながる子どもの学習サポート事業 ～毎年、10名以上の高校進学～

2000年初め、日本人と再婚したフィリピンやタイ、中国人の母親が、本国に残してきた子どもを日本に呼び寄せるようになった。渡日間もなく、日本語がわからないという言葉の壁、複雑な家族関係、親の就労が不安定という深刻な状況だった。自分の立ち位置が見出せない子

どもたちは、かつての在日の子どもと同様、夜の街で遊び回ようになった。

ふれあい館ではボランティアの力を借りながら、こうした子どもや親に呼びかけ、2004年「外国につながる中学生学習サポート」を設立。その後毎年、参加者が急増し、現在では「外国につながる子どもの学習サポート事業」で、小学生22名、中学生18名、学齢超過者8名、高校生（小中学生サポート・イベントボランティア）8名（2016年度）、毎年50数名の子ども達が参加し、学んでいる。そして、毎年10名以上の子どもが在県特別募集の高校や定時制高校に進学を果たしている。



5. 学習サポート事業の課題と3団体連携

現在に至るまで、学習サポート事業の一番大きな課題は、川崎市の事業位置づけが不十分なことと、有償ボランティア等運営費の予算がないことである。学習サポートは、識字学級の多文化家族相談のニーズから始まったが、ふれあい館事業としては付随的事业の位置づけである。2000年から約9年間、外国につながる中学生参加数は急増する中、職員体制を含めてほぼ無償ボランティア体制で運営した。2009年度から2014年度までは、国の政策が動き、文部科学省の「定住外国人の子どもの就学支援事業」で一定の予算を受け、場所及び人的体制の保障を受けることができた。この文科省補助金について、2012年度からは、横浜の「多文化共生教育ネットワークかながわ」と鶴見「ABCジャパン」と青丘社の3団体で、共同申請を始めた。きっかけは、予算的に広域の共同体制を求められた要素が強かった。もちろん、それまでも、県下のNPO団体同士、3団体のネットワークはあった。しかし、共同申請を契機に、単に財政的に共同申請するだけでなく、県下広域実践の協働体制が深化していった。

6. 川崎市学習支援・居場所づくり事業

1でも述べたように、青丘社が活動する地域は、差別と貧困状況が重層的に深刻な地域で、1980年代から今日に至るまで、経済的「貧困」に苦しむ日本人と外国人の家庭が多く暮らす地域であった。ふれあい館は1988年設立時から「こども文化センター」として、中学生、高校生の居場所づくり事業に力を注いできた。2004年から「外国につながる中学生サポート」が始まったが、対象の子ども数が多いため、とりあえず渡日3年の子どもを対象とした。そのため渡日が数年以上、また日本生まれの外国につながる子どもは対象外となり、学習塾に行かない中学生たちから「自分たちも高校受験の勉強がしたい」という訴えを受けるようになった。そのため2010年頃から、こうした子どもたちに職員や地域の青年ボランティアが手弁当で試験前学習会を開くようになった。

一方、「貧困の連鎖を断ち切る」国の政策として、生活保護世帯の子どもの高校進学率がその他の世帯に比べて低いことから、生活保護世帯の中学生を中心とした子どもの学習支援事業が国の政策として開始されていった。そして、ここ数年の間に各地の自治体でこうした学習支援事業が始まり、2015年度からは生活困窮者自立支援法に基づく事業として、全国各地の自治体で始まりつつある。



川崎市でも2012年度より川崎区で開始され、2013年度から青丘社も事業に公募し、ふれあい館の場所を使って「川崎市学習支援・居場所づくり事業」が始まった。この市の事業で対象となっているのは生活保護世帯の中学3年生のみ。しかし、青丘社ではこれだけでは十分ではないため、自主事業として、生活保護世帯の中学1年、2年生及びひとり親世帯等で生活保護は受けていないが困難な生活状況にある子どもすべてを学習支援の対象にしている。

2016年度、この学習サポートの参加状況を見ると、全参加者数60名の内、外国につながる子どもは26名、全体の43%をも占めている。貧困等、困難な生活状況にある子どもの中に多くの外国につながる子どもがいて、彼らを取り巻く厳しい家庭環境がある。また、外国人保護者の中には、日本語で情報を理解することが十分にできない「情報弱者」の人も多く、「多文化家族支援」の視点で生活支援を視座に入れた総合的な取り組みが求められている。

7. 「生活支援」を視座に入れた多文化家族支援

それでは、どのような総合的な支援が求められ、行われているかについて、具体的なケースを挙げて説明したい。

＜フィリピン人母35歳、学齢超過者17歳、中学生14歳、小学生8歳のケース＞

母は13年前、フィリピンに2人の子どもを残して「興行」ビザで来日し、スナックで働く。子どもと預け先の親戚家族に仕送りをして生活を支える。その後、お店に来ていた25歳年上の日本人男性と結婚し、日本国籍の子どもが生まれる。1年前、夫が急に病気で亡くなり、遺族年金を受けながら生活する。フィリピンへの仕送り額も少なくなり、フィリピンの子どもたちを呼び寄せ、いっしょに生活しながら助けてもらいたいと思っている。

上に挙げた事例は、私たちが川崎区でよく出会ってきた典型的なケースである。こうした母からの相談は、まずフィリピンにいる子どもを呼び寄せる在留手続きの相談に始まり、呼んだ子どもの就学手続、日本語ゼロスタートの日本語及び学習支援、福祉制度の手続き支援等多岐に亘る。また、長年離れて暮らしてきた親子関係の相談等、家族関係の問題も上がってくる。そして、大多数の女性たちは「出稼ぎ」労働の中で、日常会話を習得するものの、公的な書類

の読み書き、記入はできない。こうした状況は、フィリピンにつながる家族だけでなく、日系人家族、中国調理師の家族にも相通じるものである。

こうした外国につながる子ども＆多文化家族の相談は、行政の制度が一定程度整備されてきた昨今、さらに増加してきている。青丘社のように、「地域で、気軽に行けて、相談できる」場所、子どもたちが、高校生等になった先輩、ロールモデルにも出会い、わかりやすく日本語を学び、学習ができる「居場所」は、「行政・学校と家庭をつなぐ」存在として重要な役割を果たしている。

NPO 法人 ABC ジャパン

～外国につながる子どもと家族を包括的にサポート～

【団体紹介】

ABC ジャパンは、2000 年に横浜市鶴見区在住の日系ブラジル人が設立した互助組織です(2006 年 NPO 法人化)。入管法改正以降に増加した日系ブラジル人の雇用・生活に関する問題解決のため、また、ブラジルと日本の文化交流を通じて相互理解を深め、日本人と対等な立場で話し合う場づくりをしたい、というところから団体が発足しました。日系人を単なる「外国人労働者」としてとらえるのではなく、彼らの持つ文化とコミュニティを活性化し、日本とブラジルの文化的・社会的つながりを強化することに力を入れていると考えています。

当事者コミュニティとの密接な関係を活かし、主に「多文化共生」「定住外国人の自立」「子どもの教育保障」の 3 つを柱にして活動しています。

情報収集や親子間のコミュニケーションにも課題を抱える南米系移民たち

鶴見区は横浜市のなかで最も多くの南米系移民が暮らす地域ですが、集住から 20 年以上経っても、生活上の課題は依然として存在しています。仕事が忙しく日本語を学ぶ機会が持てないために生活上の情報も得られず、また不況になれば真っ先に解雇対象となるなど経済的・社会的に不安定な状態にあるからです。特に子どもの教育については、日本の教育制度に関する知識を持てないだけでなく、仕事の忙しさや言葉の問題から、子どもとのコミュニケーションや学習へのサポートに課題を抱えるケースもあります。

鶴見区はもともと県内でも外国につながる子どもの数が多く、小中学校には国際教室が設置され、国際交流ラウンジ等での学習支援体制も進んでいます。しかし、経済的問題や言語・文化の問題が交差することにより、不登校になったり、学年相当の学習言語が獲得できず学習に支障が生じたり、高校進学が困難になるケースも見られます。また身近にロールモデルとなる存在がなく、大学進学や将来の職業について希望を持ちにくい状況にあります。

取り組みの内容—当事者団体として、子どもと親、双方のエンパワメントを目指す

当団体は、定住外国人によって作られた団体であるため、コミュニティを熟知しており、実際に外国人として日本に住んで直面した困難や問題を把握し、本当に必要な支援活動ができるのが強みです。そして、何でも支援すればよいというわけではなく、ゆくゆくはその外国人が日本社会で自立して暮らしていけるような支援をするよう心がけています。子どもへの支援だけでなく、保護者が子どもの教育に主体的にかかわれるように保護者のエンパワメントにも取り組んできた点が特徴です。具体的には主に以下の活動を行っています。

●外国につながる子どもたちの補習塾（Amigo Juku）

学校の勉強に困り、民間の学習塾にもついていけない外国につながる子ども向けの学習塾を運営しています。少人数制で、それぞれの子どもの進度に合わせた指導をしています。保護者へはポルトガル語での面談やルビ付きの日本語の報告書などのサポートを行っています。



●学齢超過生のためのフリースクール

本国で中学校を卒業し、学齢超過のため公に学習の場を持たない子どもたちを対象としたフリースクールを運営し、高校進学へのサポートを行っています。入試までの数ヶ月間で日本語と受験科目を学習し、面接試験に向けた準備を行います。

●放課後教室「つまみ〜によ」

学校の授業についていくのが大変で、ひとりでの家庭学習も困難な外国につながる子どもを対象とした教室。鶴見区内の小学校の中で、週一回放課後に実施しています。当団体のスタッフと、大学生や社会人ボランティアと学校教員が支援にあたっています。

●大人のための日本語教室

仕事や社会生活、子育ての場ですぐに使える、実践的な日本語を学ぶ日本語教室を開講しています。20年近く日本に暮らしていてもなかなか日本語を話す機会がなく、日本語が話せない、読み書きができないという人もいて、周りを頼ってなんとかやってきたが、仕事でも生活の上でも、やはり不便なので日本語を勉強しなければと教室に入ってくる生徒さんもいます。

●電気工事士試験対策講座

電気工事士として働く人が多い在住南米人を対象として、第二種電気工事士の国家資格試験受験のための特別な日本語教室を実施しています。電気工事士としての経験も技術もある人が多いのですが、試験問題の日本語は難しく、外国人にとっては試験にパスするのは非常に困難なため、彼らのキャリアアップのための重要な学習機会となっています。



●多言語による情報提供や相談対応

就労状況が不安定で日本語を学習できない保護者に向けて、多言語の高校・大学進学ガイドンスを行っています。また、保護者や学校等からの相談に多言語で対応しており、母語で話せる安心感から、不登校やいじめ、勉強面の遅れ、部活動、進学、学費、奨学金など、さまざまな相談事が寄せられています。行政や教育機関等に保護者をつなげる役割も果たしています。



2. 3 団体の連携の歴史と意義

(1) 「外国人支援」と「連携・協働」の取り組み5年 ～意義と重要性～

◆3団体の連携・協働の経緯

外国につながる子どもの支援について、2009年度から2014年度までは、国の緊急経済対策として、文部科学省の「定住外国人の子どもの就学支援事業」が実施され、期せずして3団体（NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ・NPO 法人 ABC ジャパン・社会福祉法人青丘社）が、神奈川県下で協働実践をすすめる契機となりました。そして単に財政的につながるだけでなく、県下広域事業の協働実践体制が深化していきました。

2012年から現在まで数年間、年3回、3団体・合同研修会を持ち、県下の外国につながる子どもの実態把握、多文化家族支援に向けた実践内容の創造と共有化を行っています。特に3年前WAM助成金を受けてからは、鶴見に多文化家族支援の相談場所を設け、横浜と川崎の取り組みをつなげる拠点として機能しています。今では、神奈川県下どこの学校にも入ることができない60名程度の子どもの教育・進路相談のみならず、フリースクールなど高校進学保障をめぐる問題を連携してすすめています。

◆地域の状況について

神奈川県の外国人住民総数は185,859人（2017年1月現在）で、全国で4番目に外国人数が多い自治体です。1番は東京都、2番愛知県、3番大阪府に続いての外国人集住地域です。

そういった意味では、川崎市川崎区にある青丘社、横浜市鶴見区にあるABCジャパン、そして横浜市南区・中区を中心に活動している多文化共生教育ネットワークかながわが活動している地域は、神奈川県下の約半数の外国人が居住しており、外国人が抱える教育や生活をめぐる課題が多い地域です。

◆連携・協働から共通の目標、取り組みの共有・深化

3団体に、それぞれの特徴はありますが、外国につながる子どものサポートについて、協働・連携体制が深まる中、目指す方向性、取り組み内容も、共有化されるようになってきました。年3回行う3団体・合同研修会では、県下の外国につながる子どものケースを挙げながら分析、実態把握し、多文化家族支援に向けた実践内容の創造と共有化を行っています。また、移動していく子ども、家族についても、相談をつなぎ、連携して取り組んでいます。現在では、各団体とも次の3点の目標を明確にしながら、取り組みを深めています。

①日本で定住化を目指す「外国につながる子ども」の就学・進路（高校進学等）を保障します。そのために教育行政を始めとする関係機関と連携しながら、多言語及び民族ネットワークを活用した情報を発信。そして、初期日本語教育、基礎的な学習言語の指導、また進路に向けた学力保障及び、相談をすすめてきました。また、子どもや保護者に、通訳を含め日本の教育制度の理解をすすめ、可能な限り、相談に付随する生活相談、サポートにも取り組んできました。

②学齢超過者や不登校児童・生徒、未就園児などの外国につながる子どもたちに安心して勉強 でき

る場を提供し、日本語・教科支援、受検指導を行っています。彼らの教育を受ける権利を保障し、学習環境を整えるために関係機関への働きかけを実施しています。また、地域内で孤立しがちな外国につながる保護者に対しては、多言語、及びソーシャルワークの視点を持った継続的な相談、サポート体制に力を注いでいます。

③高校受検に対応する「学びの場」となること、同世代の子どもたちの「居場所」となること、日本の学校生活への「橋渡し」となることを目指しています。そのために入試に対応できる日本語力、教科の力をつけることに力を注ぎます。さらに母語によるカウンセリングを同時に行い、子どもたちの抱える状況理解に努めています。実践的な日本語を学び、生徒同志の交流を深めるために、校外授業や地域の行事にも参加してきました。

◆連携・協働事業の成果と課題

今、この3団体には川崎市の川崎全域、横浜市鶴見区、横浜市の南区、中区、保土ヶ谷区、瀬谷区というように、横浜市全域から子どもが通っています。大和市、相模原市、一部東京都大田区の子も通ってきています。現在では、県下の学齢超過者約60名が、毎年3団体のフリースクールに通っています。フリースクールの内容も、前に挙げたように、保護者への支援を含め、共通の支援内容が保障されるようになりました。また、こうした子どもたちが恒常的な「居場所」に通うことで、相談が継続され、保護者を含め、様々な生活相談もすすめられています。子どもたちは、学齢超過者だけではなく、不登校状態の小学生、中学生も多く、地元の教育委員会、学校と連携しながら、日本語や学習支援をすすめています。それらすべての相談件数は、3団体を合わせると、年間約800件に上ります。

特筆すべきことは、こうした協働体制が継続する中、各地域でサポートを受けて、就学や高校進学、さらに大学に進んだ外国につながる子どもたちが、先輩として教室にボランティアとして関わったり、いろいろな場で経験談を話したりする機会が増えていることです。彼らの圧倒的な強みは、こうしたアドバイスを中国語やタガログ語等、母語で行えることです。このように後続く後輩たちの良きロールモデルとなっている先輩たちの職能を確立し、「多文化社会コーディネーター」として活躍できるような仕組みづくりが、今後に向けた大きな課題です。

◆県下を超えた広域の相談・協働体制

2011年～2014年の「文部科学省 虹の架け橋事業」の3団体（NPO法人ABCジャパン・社会福祉法人青丘社及びME-net）の共同申請により、神奈川県下でのさまざまな背景を持つ外国につながる子どもの実態を把握し、就学や進路相談を広域の連携ですすめられるようになりました。2015年からのWAM事業助成では、3団体の相談の連携だけでなく、実践内容の連携も強化されました。さらに2016年度からは、神奈川だけでなく埼玉・茨城・静岡（浜松市）との連携、2017年度には、東京・千葉・栃木が加わり広域の連携が進みました。2018年度は群馬・福島や関西地方への連携拡大を考えています。

(2) 3 団体研修会の学びから

社会福祉法人青丘社 黄浩貞

神奈川県内で外国につながる子どもたちの学習問題をはじめ、その家族（以下、多文化家族）をサポートしている ME-net、ABC ジャパン、青丘社が 2012 年度より実施している 3 団体研修会。私自身、この研修会に参加し始めたのはおよそ 3 年前からである。参加し始めた当時は青丘社の多文化フリースクールのボランティアスタッフとしてであったが、昨年度からは青丘社の外国につながる中学生の学習サポート教室のコーディネーターとして参加している。ボランティア時代に比べれば、教室の中で関わる子どもの数もそうだが、子どもの保護者を含む多文化家族との付き合いが多くなってきた分、私自身の関わり方や相談対応について悩まされることが多くなっている。そんな未熟者の私が、教育現場や生活相談の場など、それぞれの現場で長期にわたり外国につながる子どもやその家族に関わってきた先輩方のこれまでの歩みや想いを聞かせてもらう貴重な場。それが三団体研修会である。

今年度実施された 3 団体研修の中でも深く心に残ったのは、8 月末、鶴見国際交流ラウンジで行われた会である。青丘社の学習サポート教室でコーディネーターを務めている多賀重久先生と加藤久美先生が登壇し、「学校教員としての外国につながる子どもたちとの出会い」や「学習サポート教室での出会い」を中心に各自の思い出を聞かせてもらった。実際、何年も共に学習サポート教室で活動し、共に様々な課題で話し合ってきたものの、二人の教員としての経験談や活動の原動力になった子どもとの出会いについては直接聞く機会がなかった。近くにいながら、近くにいたからこそ聞けなかった話を、そして口から出された強い想いを忘れることができずにいる。

はじめは、多賀先生が現職教員時代に出会った、中でも川崎区桜本地域に着任して出会った在日コリアンルーツの子どもたちをめぐる話だった。小学校の卒業証書に通名（＝日本名）で記載されることを望む子どもと、民族名で記載することを望む保護者の「名前」をめぐる問題、新渡日児童が家庭背景によって学校で中々落ち着かず徐々に荒れていった話など…。1990 年代の事例とは思えない、今の時代にもまだ続いている外国につながる子どもたちをめぐる問題の連続性が、そして何より子どもたちを放っておけず粘り強く追いかけて回った多賀先生の熱い想いが、会場の全員を圧倒していった。

続く加藤先生の話では、自身がどういった経緯でサポート教室に関わるようになったか、またこれまでサポートしてきた子どもたちが抱えていた問題は何だったか、様々な事例が挙げられた。また、高校教員という自身の立場から、高校の中で出会った外国につながる子どもたちの将来の不透明さや卒業後の不安などが語られた。

研修会に参加していながらも、気になって気になって仕方がない家族のことが頭から離れずにいた。彼らにどうアプローチしていくか、どう話を持ちかけるか、そもそも私自身はその家族に最後まで付き添えるエネルギーがあるだろうか、などなど…。しかし、二人の話を聞いていくうちに、本当に現場で子どもたちを、その家族を支えていきたいのであれば、気を引き締めなければならないと自分に言い聞かせるようになっていった。ひたすら一人ひとりの子どもを諦めず追いかけていく熱い想いを持たなければ、せっかく私を信じて色々な悩みや心の底を開けて相談してくれた人たちを、放っておくことになる。だからこそ、二人の語りを活かして、いかにいま自分の目前にいる子どもとその家族を大切にしていくかを、自分だからこそできる方法を今後模索しなければいけないであろう。

3 団体研修会に参加して

NPO 法人 ABC ジャパン 岩下 真己

8月29日に鶴見国際交流ラウンジにおいて開催されたME-net, ふれあい館, ABCジャパンの3団体研修会に, 私はABCジャパンの教育支援スタッフの一人として参加した。運営にかかわることの少ない, いわゆる休日ボランティアとして活動せざるを得ない私にとり, このような機会は, 所属団体の仲間や, 他団体と問題意識を共有する上で非常に重要である。また, 日常生活の中で薄れがちな, 活動に携わり始めたころの情熱をもう一度思い出したい, という想いも参加を後押しした。結果的に, こうした私の狙いは予想を上回る形で果たされることとなった。

以下, 同研修会にて発表のあった「実践と想い, 大切にしてきたこと, 外国人との協働実践」について, この欄をお借りして私の感じたことを述べたい。

私は話し手の多賀さんの経歴について, 恥ずかしながら何の知識も持ち合わせていなかったため, 発表内容についてただ想像することしかできなかった。ふれあい館の現在の活動についての紹介がされたのだが, 実際は, それ以前に遡る形で, 多賀さんが教師をされていた頃の在日コリアン生徒との出会い, 心の交流についてのお話が主な内容を占めた。私はその壮絶さに強い衝撃を受けたが, これについては本欄では語り尽くせない。ただ, 決して相手を見捨てない多賀さんの寛容さ, 情熱, そして人間性に心を打たれた。

私にとっての発見は, こうした教師時代の想いこそが, 多賀さんの原動力となっていることである。いわゆるニューカマーを対象とする活動に携わる中で, 在日コリアン等オールドカマーとの関連性は私にとり実感を伴わないものであった。しかし, 外国につながりを持つ子どもの教育に関し今の日本が抱える問題は, 過去の歴史からの連続性の中で捉えるべきものである。昨今のグローバル化による突然降りかかってきた問題ではなくて, 私たちが見て見ぬふりをしてきた, 未提出の宿題のようなもの, と表せるだろう。多賀さんとしては当然の帰結かもしれないが, 若い世代の私たちがしばしば見落としがちな視点であり, 気づきを与えてくださったことに感謝をしたい。

その後の懇親会では, 近くのペルー料理屋でしっかりと「交流」することができた。多賀さんともお話しする機会を持て, 喜ばしい限りである。設立経緯は異なれども, 志を同じくする団体が団結を強めることは, 参加者個人の成長はもちろんのこと, 活動に深みを与え, 相乗効果を生むだろう。このことが改めて認識できた, 非常に意義深い会であったと思う。

(3) 高校進学ガイダンスに関わって

NPO 法人 多文化共生教育ネットワークかながわ 西 ジュリアナ 春美

1995 年に全国に先駆け実施した「日本語を母語としない人たちのための高校進学ガイダンス」。

「日本語を母語としない人たちのための高校進学ガイダンス」（以下ガイダンス）とは、高校進学を希望する外国につながる若者及びその家族にとって、入試制度や学費のこと、高校の選択などのわかりにくい内容を通訳を介して説明を受けられるイベントとなっています。現在神奈川県内 6 ヶ所で実施し、そのせいか神奈川県は外国につながる子どもの高校進学に関して、全国でも有数の高い実績をあげています。またこのガイダンスは現在約 20 都道府県で開催されています。

私がこのガイダンスにスタッフとして関わり始めたのは 2012 年からです。私はブラジル生まれの日系ブラジル人で、普段は ME-net 事務局で仕事をしています。約 5 年程ガイダンス事業に事務局という立場、当事者という立場に関わってきましたが、近年のガイダンスを見ても、その時々ニーズに合わせて柔軟に変化をしている印象を受けます。例えば、入試制度や面接の説明でも、若者やその家族に分かりやすいよう、途中映像を交えて面接の様子を紹介したり、また全体説明で複雑だった箇所を個別の相談に切り替えたりと着々と変化を遂げています。こういったところが NPO 法人としての強みでもある、柔軟に対応する力なのではないかと思います。

一方、私自身も高校進学する際に目の前にある受験という壁を乗り越える為に必死になるあまり、高校入学後の生活やさらにいうとその後の進路を考える余裕がなかったように思います。近年、参加者の中から「〇〇高校に進学すれば大学には行けるの？」だとか「高校卒業後の進路について不安」という声もあります。高校進学はあくまでも通過点です。大切なのは高校進学後に何を学びたいか、どういう仕事に就きたいか、というところだと思います。そういった少し先の人生にも目を向けてもらえたら、後悔のない進路選びができると考えています。そのちょっとしたヒントをガイダンスで散りばめられたら、高校入学をゴールではなくスタートだと思えるような工夫ができたら、更に実のあるガイダンスになると思います。またガイダンスではカバーしきれない教育に関する相談等を ME-net の教育相談窓口などで多角的に支援ができる仕組みを強化していけたら、さらにたくさんの外国につながる子どもたちの教育をサポートできるのではないかと思います。



3. 多文化家族は何を「問題」にしているのか？（続編）～団体別・地域別特性から考える

今回実施された多文化家族相談データ調査は、昨年度(2016 年度)WAM 助成金を受けて作成された『多文化家族支援相談事例集』の第 2 節「多文化家族は何を『問題』にしているのか？¹⁾」の続編として位置づけられる。2016 年度の相談データ分析は、「多文化家族支援」をキーワードにつながりを持つ 6 つの団体²⁾から受けた 1,196 件の相談内容から、広域データ収集を行うことで見えた多文化家族が抱える「問題」を明らかにし、出身国・ルーツと相談内容、性別や就業・就学状況の関連性を見出したと言えよう。しかし、広域データ収集による「大きい」多文化家族・外国につながる人々の問題は見出せられたものの、「相談対応」の中で相談を受けた各団体の特色や地域性などは関連付けることが難しかった。そのため、各団体がいつもつながりをもつ、または出会いやすい多文化家族との関わりが隠れてしまった。だからこそ、今年度(2017 年度)は、各団体が受けている相談について団体別にまとめることこそが、それぞれが実施している取り組みと関連付けて理解してもらうことができると思われる。そして、今回の相談データは前回実施した 6 団体に、新たに「NPO 法人多文化フリースクールちば」が協力団体として加わり、より広い地域で多文化家族たちがどのように暮らしているかが見えてきた。各団体が行っている活動や実践状況については団体紹介のページに紙幅を譲ることにする。

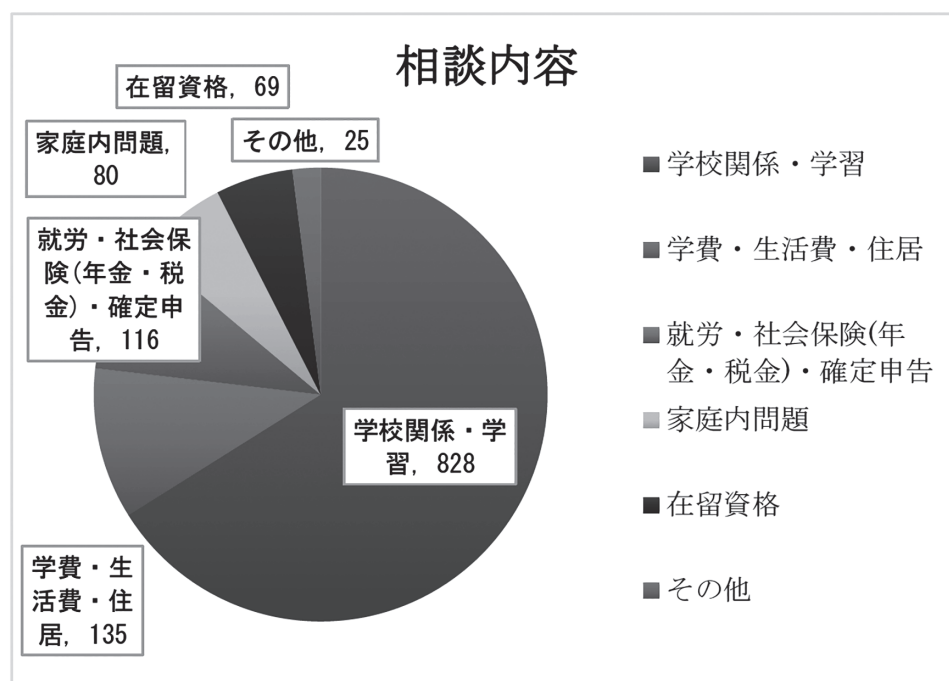
今回、各団体より寄せられた相談件数は計 1,248 件にも上り、横浜を中心に神奈川県全体で相談を受ける ME-net では 200 件、横浜鶴見を拠点にする ABC ジャパンでは 405 件、京浜工業地帯に隣接し川崎区を中心に活動する青丘社は 200 件、茨城県のコモンズでは 103 件、静岡県のフィリピンナガイサでは 100 件、埼玉県が多文化こども支援連絡会では 191 件、千葉の多文化フリースクールちばでは 49 件の相談データが寄せられた。各団体によって相談を受けた時期は少しずつ異なるが、ほとんどの団体が 2017 年 4 月から 2018 年 1 月または 2 月までの相談を今回データとして使用した。

¹ 『多文化家族支援相談事例集』の p.7-18 を参考。

² WAM 助成金の委託を受けた ME-net をはじめ、その協力団体(ABC ジャパン、青丘社、茨城 NPO センター・コモンズ(以下、コモンズ)、フィリピンナガイサ(以下、フィリピンナガイサ)、多文化こども支援連絡会の 6 団体が実施。

●相談内容について

今回、相談データを収集するにあたって、相談内容については昨年度の 19 の項目³を、6 つの項目(①学校関係・学習⁴、②在留資格⁵、③家庭内問題⁶、④学費・生活費・住居⁷、⑤就労・社会保険(年金・税金)・確定申告⁸、⑥その他)に簡略化した。以前の 19 項目に細分化する方法は多文化家族が抱える問題についてより詳細かつ深層的な分析はできるかもしれない。だが、各団体によって受けている相談内容の解釈が異なることや多文化家族が抱える主たる問題が見えにくくなったため、今回は相談内容項目を簡略化することにした。



左にあるグラフが今回集まった全団体から受けた相談内容を項目別に分けたものである。全 1,248 件ある相談件数のなかで 66%を占める 828 件が「学校関係・学

習」に関する相談であり、これは今回相談を受けたすべての団体が外国につながる子どもの学習支援事業であったことが起因すると推測される。「学校関係・学習」に次ぐ 2 番目に多かった相談が「学費・生活費・住居」、3 番目が「就労・社会保険(年金・税金)・確定申告」、4 番目が「家庭内問題」であり、「在留資格」に関する相談は 5 番目となった。

³ 学校(進学)、学校(トラブル)、学校(学習)、学校(費用)、在留資格、生活費、就労、住居、DV、精神的問題、社会保険、親子関係、年金、不登校、税金・確定申告。

⁴ 就学、進学、成績、学校内トラブル、不登校、転校、転入、日本語学習などを中心に。

⁵ 在留資格申請・変更、その他在留資格申請における手続き方法の相談など。

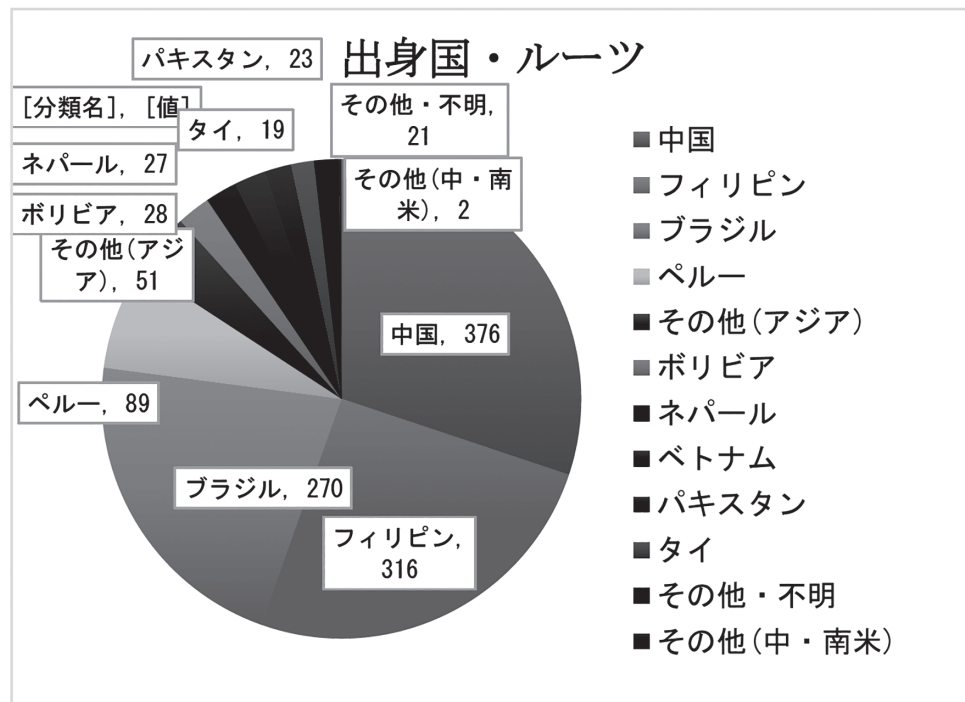
⁶ 親子関係、虐待、DV、離婚、子どもの親権をめぐる問題など。

⁷ 学費、修学旅行の旅費、公共料金、家賃支払いなど。

⁸ アルバイト、仕事探し、失業、転職、給料未払い問題、年金・保険、確定申告方法に関する相談など。

●出身・ルーツについて

今回の相談データでは中国出身・ルーツをもつ人々からの相談が最も多く(376件)、続いてフィリピン(270件)、ブラジル(270件)、ペルー(89件)、その他(アジア)⁹が(51件)、ボリビア(28



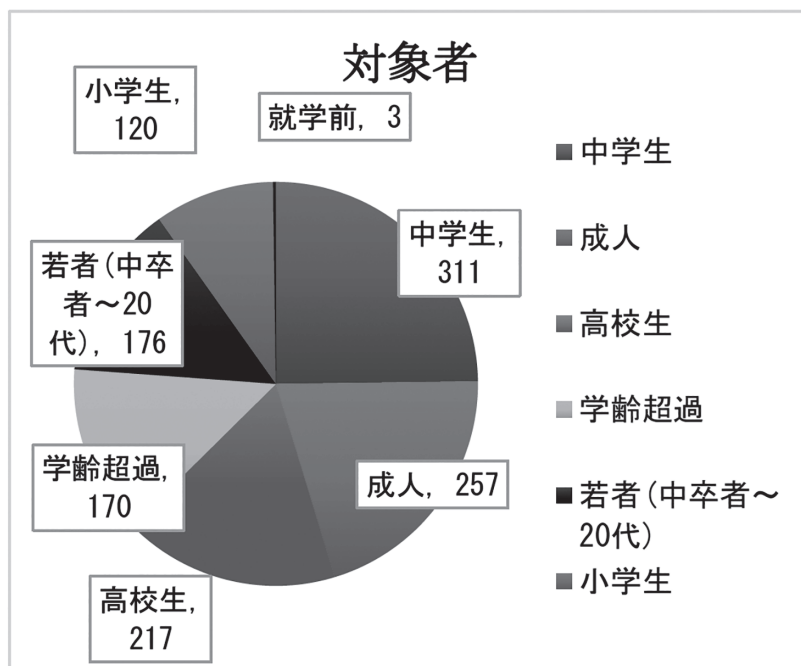
件)、ネパール(27件)、ベトナム(26件)、パキスタン(23件)、その他・不明¹⁰(21件)、タイ(21件)、その他(中・南米)が2件となった。

⁹ 今回の相談データを集める際に使用したエクセルシートの出身・ルーツを選択する項目には、昨年相談が集まった多文化家族のつながる国として中国、フィリピン、ベトナム、ネパール、パキスタン、タイ、ブラジル、ペルー、ボリビア以外にルーツをもつ相談者への項目としては「その他」のみを設けた。しかし、上記羅列した国々以外の出身・ルーツを表記するにあたって、少なくとも「アジア」と「中・南米」で分ける必要があろうと思い、その他を2つ(その他(アジア)、その他(中・南米))に分けることにした。

¹⁰ 相談者の出身・ルーツを主にアジア諸国と中・南米諸国を想定していたが、コンゴを含むアフリカ諸国出身・ルーツを持つ中高生や成人からの相談があることが分かった。また、相談データを集めた際に出身・ルーツが記入されていないこともある。

●対象者について

前回の相談データでは、対象者が「就学・就業」しているか否かを重点に見ていたが、それでは、出身国において9か年の教育課程を修了後来日したいいわゆる「学齢超過」の子ども

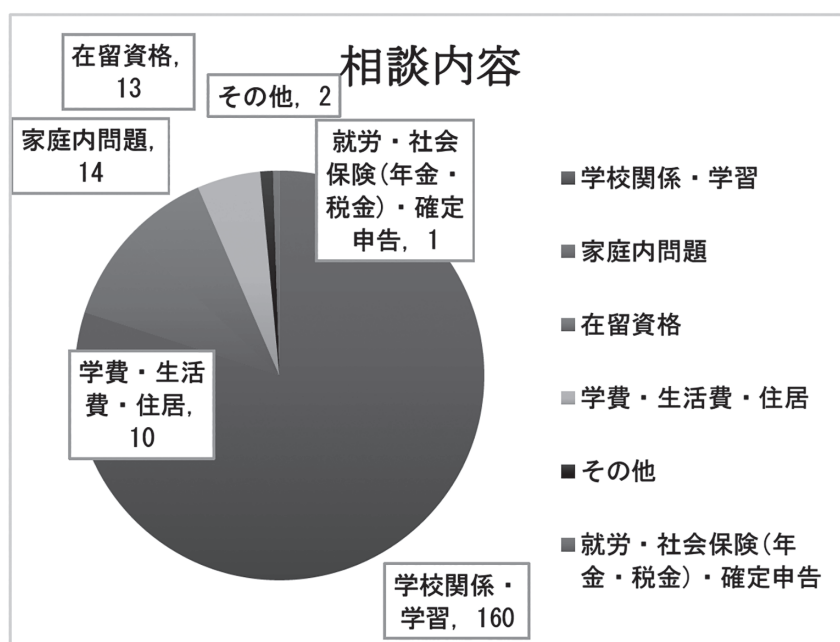


たちが対象者として見えにくかった点がある。そのため、今回は対象者については「就学前」、「小学生」、「中学生」、「高校生」、「成人」に、新たに「学齢超過」の項目を設けた。また今回は、例えば本国で9か年の教育課程を修了後来日してすぐ働き出している

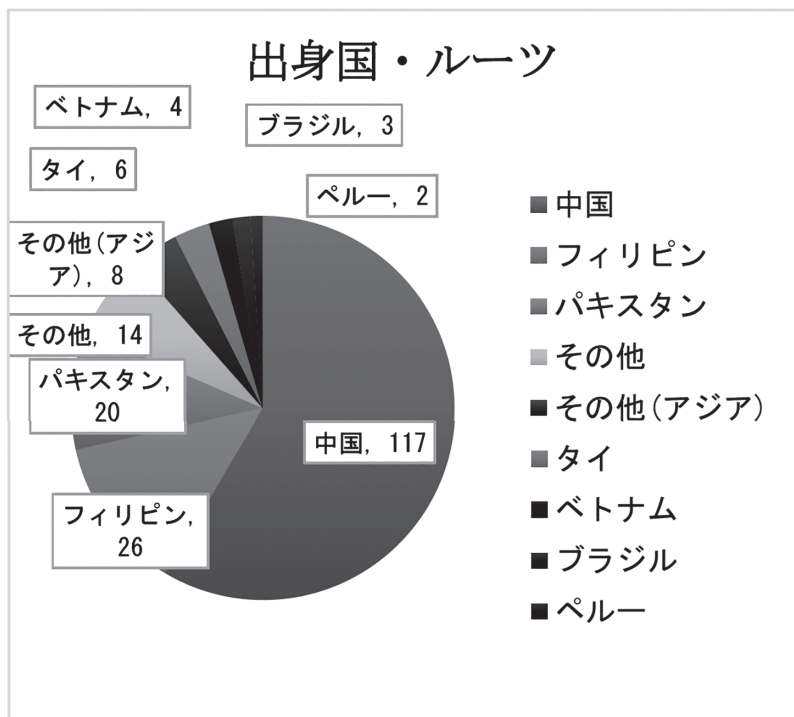
人からの相談や高校を途中で退学した人の存在を含めた「若者(中卒者~20代)」という項目を設けた。

1. <ME-net> (横浜)

横浜市を中心に神奈川県内に暮らす外国につながる子どもたちの教育問題に携わっている ME-net では、2017年4月から2018年2月までに200件の相談が寄せられた。その相談内容を見ると外国につながる子どもたちの教育問題を中心に活



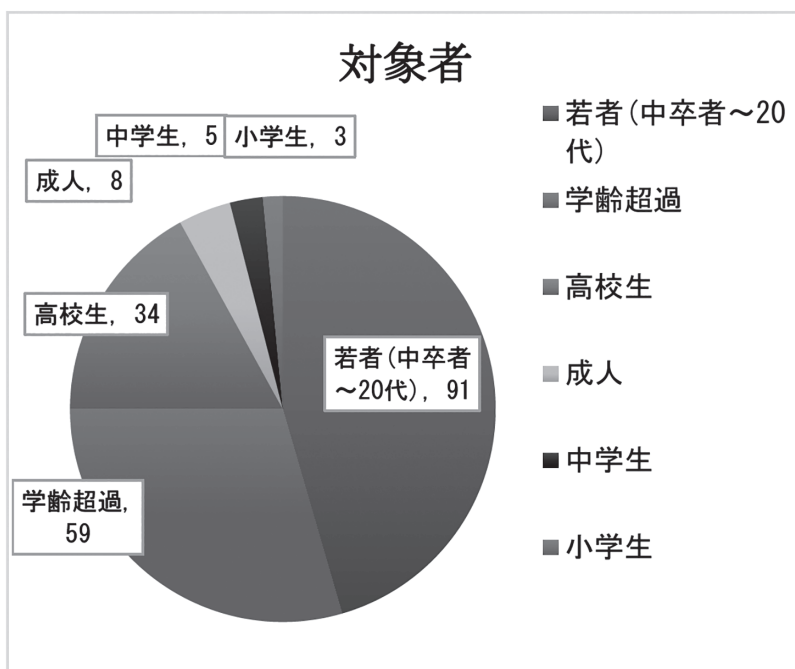
動している団体である分、「学校関係・学習」に関する相談が最も多く(160 件)、続いて「家庭内問題」(14 件)や「在留資格」(13 件)に関する問題が寄せられ、外国につながる子どもたちを取り巻く学校・学習関係の問題から始まり、彼／彼女らの家族から様々な生活相談が寄



せられるようになったと思われる。

続いて、ME-net で相談対応した対象者の出身国・ルーツでは中国が 117 件と半数を超える数であった。ME-net の学習教室が置かれている南区と隣接する中区は、中華街が立地していることもあり、中華料理屋で働くコックまたはホールス

タッフとして先に来日した親が、日本での生活が安定し子どもを呼び寄せることが理由として考えられる。また、中国につながる対象者の多くが中学生以上から若者(中卒者～20 代)であることに着目したい。上述したように、日本での生活が安定した親に呼び寄せられた子どもが日本の高校に入学することをめざす学齢超過のみならず、学習教室を卒業し高校に進学した人、高校も卒業した後の世代からの相談も多く寄せられていることがうかがえる。



もう一点、注目できることは

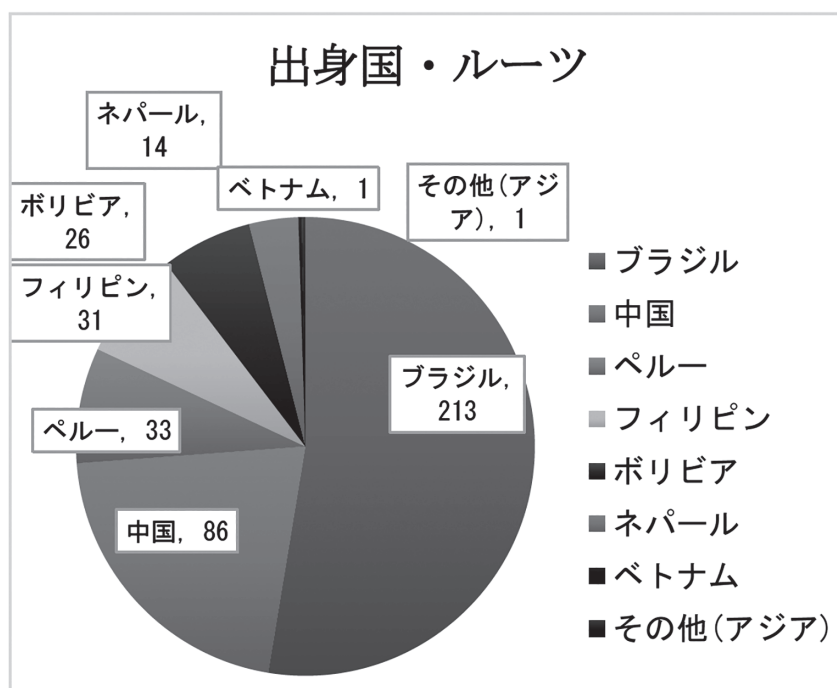
今回 7 団体から集まった相談データの中で、最もパキスタン出身・ルーツを持つ人々の相談が多く寄せられていることである。パキスタンにつながる対象者からの相談は学校関係・学習であるだけでなく、生活費・学費・住居に関する問題や在留資格をめぐる相談が目立っており、生活や日本での在留資格が不安定な若年世代のパキスタンにつながる人々の相談の場にもなっている。

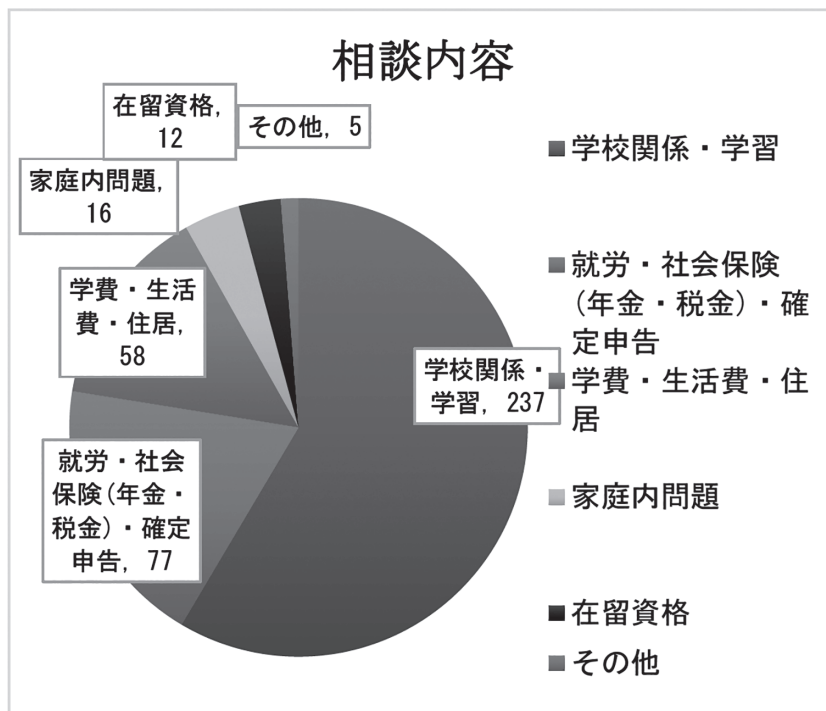
2. <ABC ジャパン> (鶴見)

京浜工業地帯の一角として日本の近代工業化と共に発展し、1990 年の出入国管理法改定以降、南米系の人々が集住するようになった横浜市鶴見区に拠点を持つ ABC ジャパン。特に鶴見駅東口から臨海部に続く地域の中で、ブラジル系コミュニティの中心役を担っている当団体には 7 団体のうち、最も多くの南米ルーツを持つ人々からの相談が寄せられた。2017 年 4 月から 2018 年 1 月末までで 405 件もの相談があり、ブラジル人を中心にペルー、ボリビアにつながる地域の住民のみならず、隣の川崎、神奈川県内の厚木市、大和市に加え静岡県や茨城県からの相談者もいた。

また、ABC ジャパンが受けた相談の対象者には中国やフィリピン、ネパールにつながる多文化家族が多いことから「鶴見」という地域の中に暮らす多様なルーツの多文化家族が混住していることが見られる。

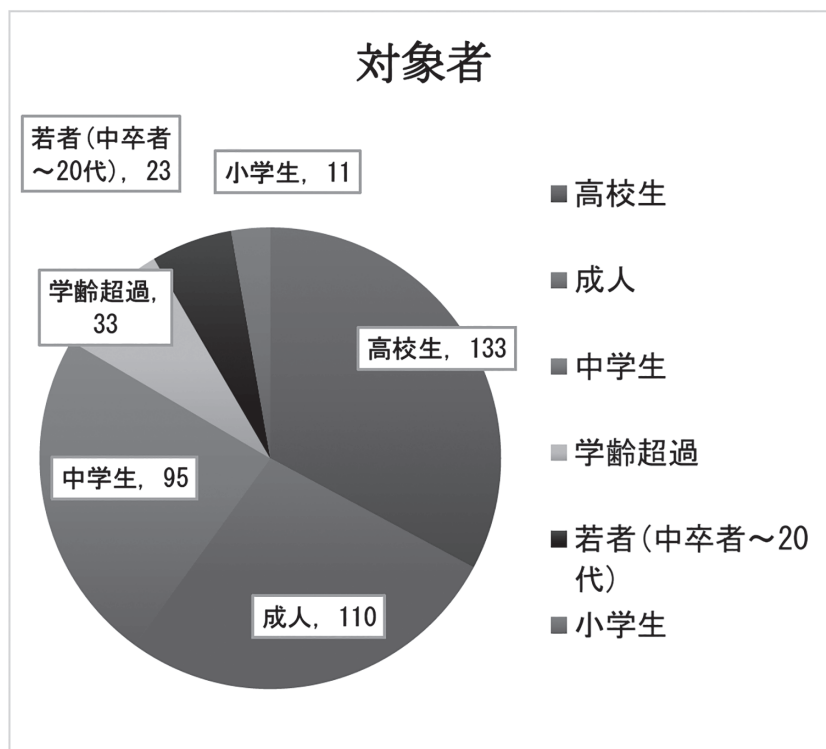
鶴見を拠点に遠方からの電話や SNS などによる相談も行われている当団体にも、学校関係・学習に関する相談が最も多く、また相談内容の対象者の 272 人が小学生、中学生、学齢超過、高校生である。つまりそれは、多文化家族が





子どもを通して日本社会と接点を持つ中で、最も困難を抱えていることは「学校教育」や日本語習得をも含む「学習」であることがうかがえる。

そのみならず、当団体には高校生や成人による就労・社会保険(年金・税金)・確定申告、学費・生活費・住居に関する「生活課題」の相談が多かった。



それは、多文化家族の高校生の多くは経済的に厳しくアルバイトと学業を両立しなければならない状態にあることを表している。成人は工場アルバイト(鶴見の場合、特に工場で就労する女性が多い)を含む不安定な就労環境に置かれていることで経済的不安を抱えているこ

とが見られる。

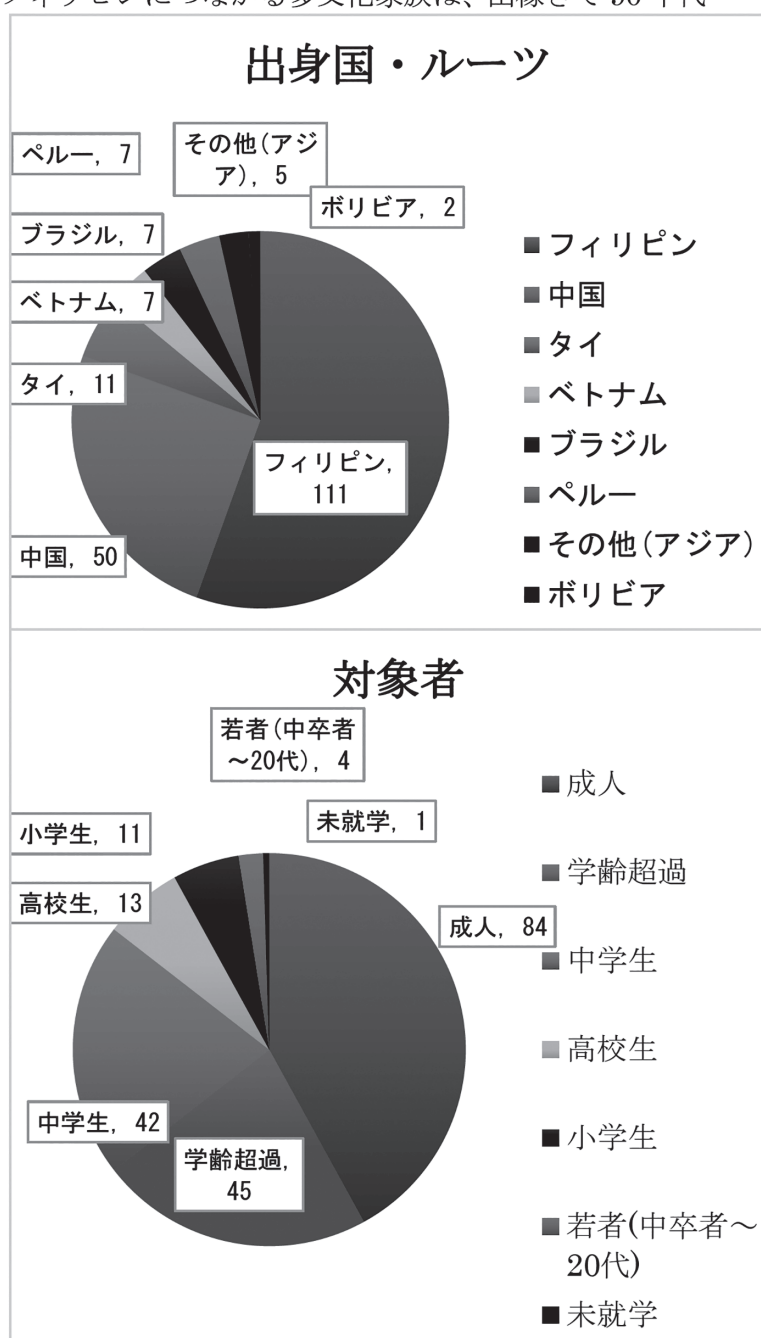
3. <青丘社> (川崎)

神奈川県最東部で横浜市と東京都の間に挟まれている川崎市で、川崎駅から臨海部に向かう場所にある青丘社は、京浜工業地帯に隣接し、駅前には商業施設が立地し各種飲食街がある繁華街である。2016年度の報告書にも記述したように、古くから「朝鮮人部落」と呼ばれる在日朝鮮人集住地であったが、鶴見同様、1990年の入管法改定により南米出身の日系人労働者が急増し、特に2000年代以降、駅前飲食店や臨海部の工場に就労する中国系やフィリピン系の人々が増加してきた。とりわけ、フィリピンにつながる多文化家族は、出稼ぎで90年代

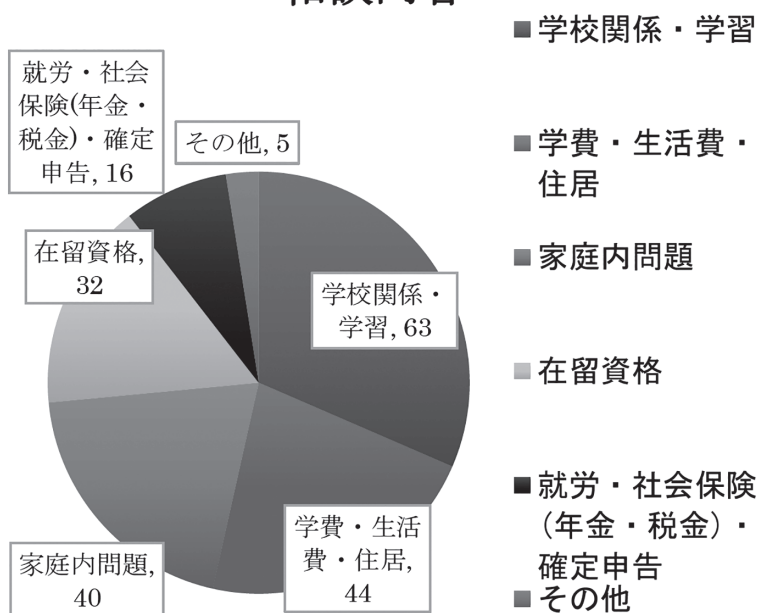
以降来日した女性たちが日本人男性と再婚し、2000年代以降、フィリピンから子どもを呼び寄せたことで相談が急増してきた背景がある。

それに加え、当団体には外国につながる小学生、中学生、また学齢超過の学習サポート教室があることや来日間もない子どもの学校への入学・編入手続きの相談も寄せられていることで、出身国・ルーツや対象者に多様性が見られる。

青丘社が受けた相談内容で最も注目すべき点は、「家庭内問題」や「在留資格」をめぐる相談が他団体に比べ多くみられることである。とりわけ、フィリピン出身・ルーツの成人の相談件数も多いことから、日本人男性と結婚したフィリピン人女性た



相談内容

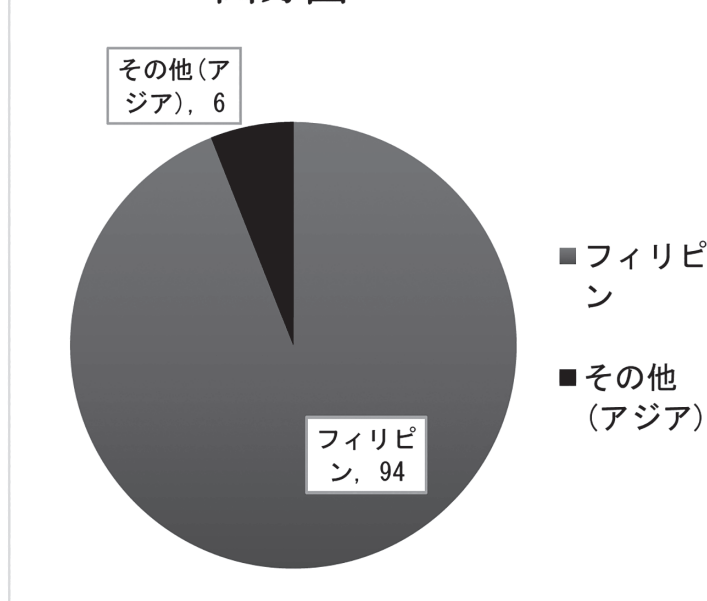


ちが DV を含む離婚、子どもの呼び寄せをめぐるパートナーとのトラブルで相談することが多い。また、パートナーの病死などでシングルマザーになった女性たちが子どもの学費だけでなく、生活全般において経済的不安定さの問題を抱えていることがうかがえる。

4. <フィリピノナガイサ> (静岡)

静岡県浜松市に拠点を置き、フィリピンにつながる人々とネットワークをもつフィリピノナガイサでは、2017 年 5 月から 2018 年 2 月末まで受けた相談データを中心に分析を行いたい。フィリピノナガイサがある浜松市は、輸送機器等の製造業や大規模な工場が立地する地域であり、南米ルーツの日系人集住地域として知られている地域である。近年、特に日系ルーツをもつフィリピンにつながる多文化家族の増加に伴い、子どもの教育相談が寄せられたと思われる。

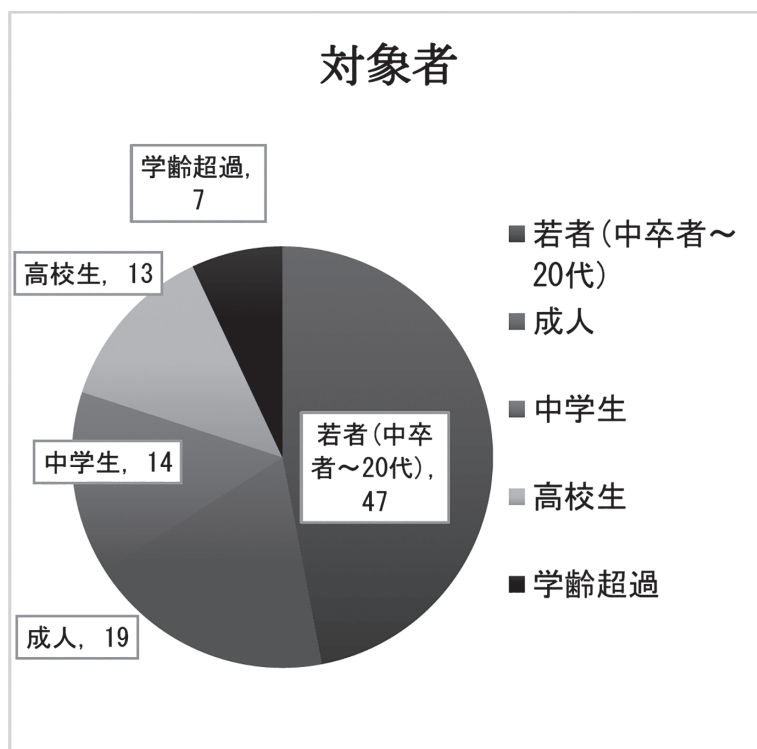
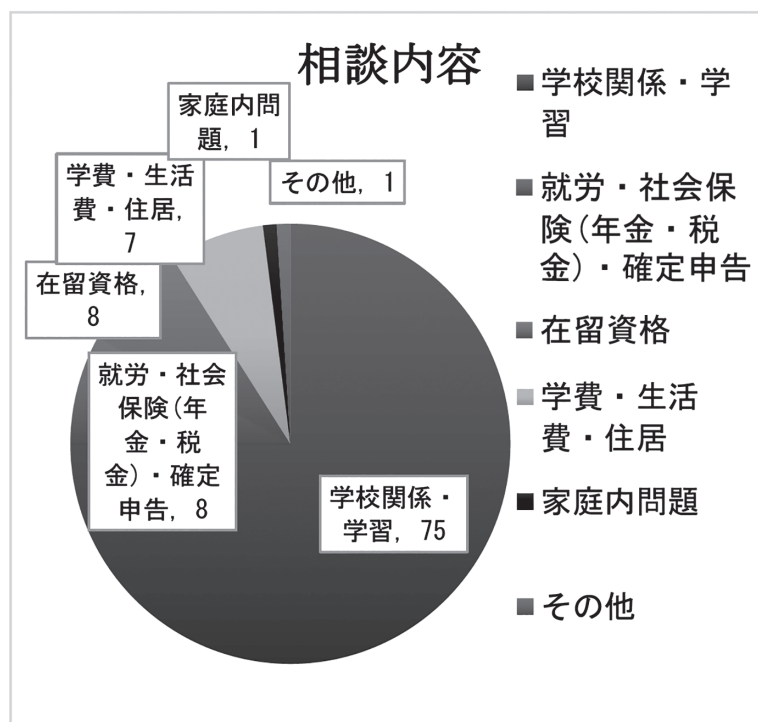
出身国・ルーツ



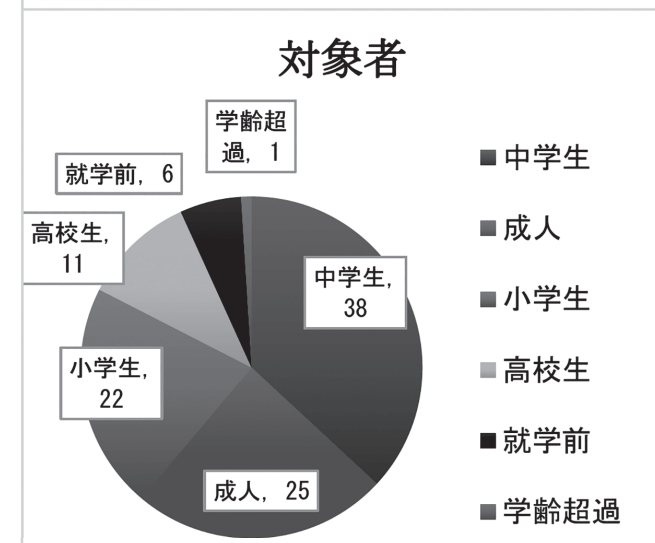
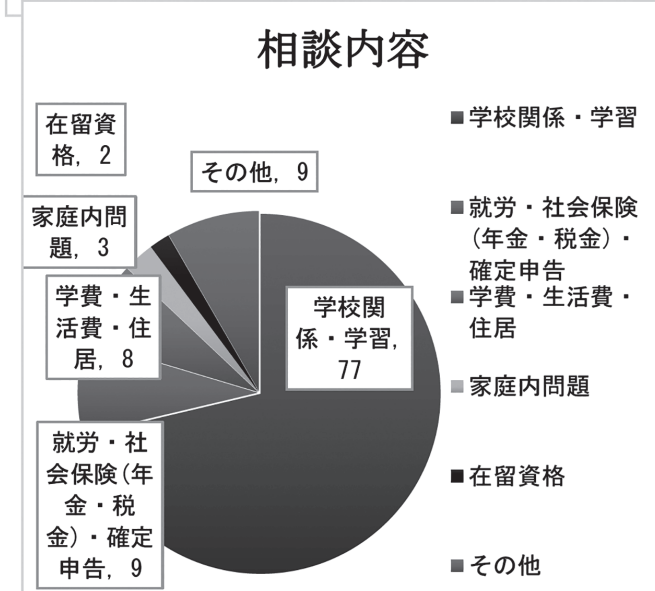
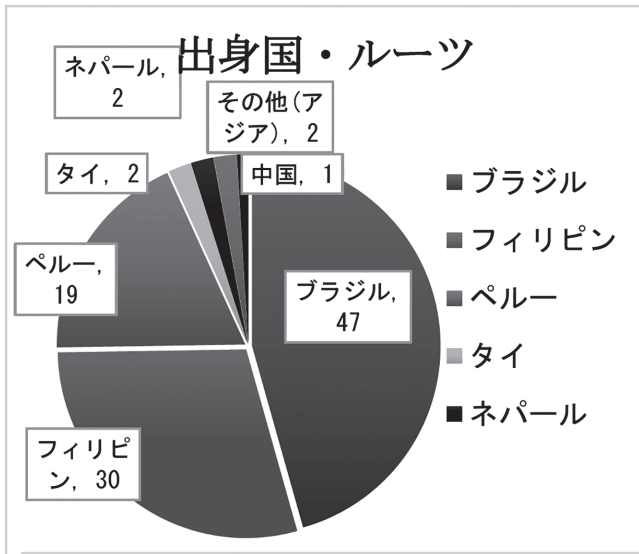
全体相談件数 100 件の中で、対象者は全員静岡県内に居住しており、中学生に関する相談 14 件はすべて学校関係・学習の内容であった。また、当団体で受けた相談で特に注目すべき点がある。それは、当団体に寄せられた 8 件の在留資格に関する相談のうち 7 件が若者（中卒者～20 代）からの相談である

ことである。この事例に関しては対象者各自の生活背景が見えないため断定できないものの、置かれた労働環境を含む不安定な生活が関連しているのではないかと推測される。

また、フィリピンナガイサの最も大きい特徴は、全体相談 100 件のうち 77 件が継続して行われていることと言えよう。



5. <コモンズ> (茨城)



茨城県の水戸市と常総市に拠点をもつコモンズでは¹¹、2017年4月から2018年1月末まで行った103件の相談があり、対象者も1人を除き全員が茨城県在住であった¹²。当団体で行った相談データの特徴としては、ブラジルやフィリピン、ペルーにつながる多文化家族の相談の際、通訳が

同伴することが多かった(82件)。相談対象者としてはブラジルにルーツを持つ人が最も多く(47件)、続けてフィリピン(30件)、ペルー(19件)、タイ(2件)・ネパール(2件)、その他(アジア)(2件)、中国(1件)の順になっている。茨城県全体としては2017年6月末現在、60,163

人の外国人住民がおり、中国、フィリピン、ブラジル、ベトナム、タイ(上位5位)の順である。だが、当団体が相談を受けた対象者の出身国・ルーツは、県内外国人住民人口順とは異なっており、それは当団体の相談機能拠点である常総市

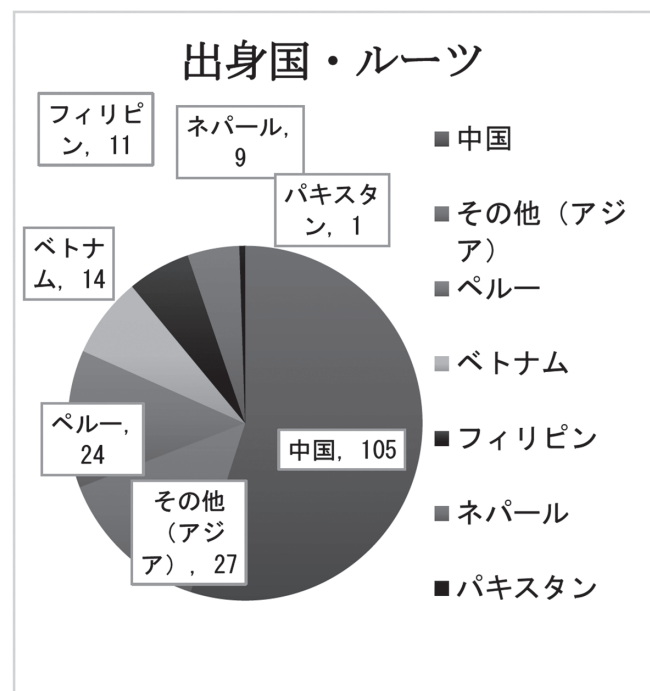
¹¹ 当団体は水戸市に本部を、常総市には相談拠点としてスタッフや通訳者が相談を受けている。

¹² その1人の相談者の居住地は「その他」の地域であるため詳しい居住地は不明である。

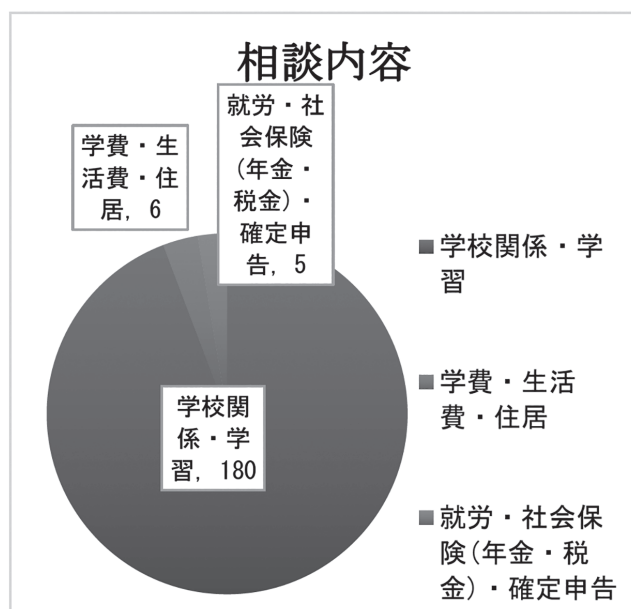
の地域的特性と関連していると思われる。常総市は関東への製品供給地点として 1980 年代以降工業団地が建設され、南米系の多文化家族が集住している地域があり、ブラジル人集住地域としては全国有数である。この地域に、近年フィリピンにつながる人々も増加している。

相談の内容としては中学生や小学生、高校生の一部を中心に学校関係・学習に関する相談が最も多く、成人からは就労・社会保険(年金・税金)・確定申告や学費・生活費・住居をめぐる相談が目立つ。また、高校生からも経済面における不安が見られる。これは上記 ABC ジャパン(鶴見)や青丘社(川崎)のように工業地帯に暮らす多文化家族と同じく、不安定な就労形態による生活面への不安や悩みが見受けられる。

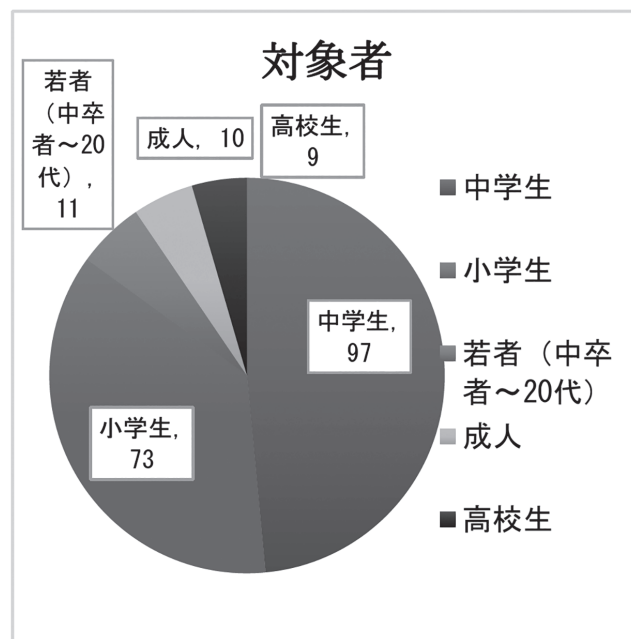
6. <多文化子ども支援連絡会> 埼玉



冒頭にも述べたように、埼玉の「多文化こども支援連絡会」は埼玉県内でも 5 つの団体が協力・協働している団体であり、2017 年 4 月から 2017 年 12 月末まで各団体より寄せられた相談は 191 件であり、191 件のうち 185 件もの相談が継続的に行われている。埼玉県内に



は 2017 年 6 月末現在、160,026 人の外国人住民が暮らしているが、2013 年末には 123,294 人、2015 年末には 139,656 人の外国人住民登録があったことから考えると、そのペースは著しく速いと言える¹³。しかし、中国にルーツをもつ多文化家族の場合、1972 年日中国交正常化より戦前旧満州地区に移動した日本人やその子孫がいわゆる「残留孤児」や「帰国者」として



日本に渡った際、所沢市を中心に中国帰国者支援団体やセンターがあったことを考えると、日本国籍を持っている中国ルーツの多文化家族が住民登録上隠れてしまっていることが推測できる。しかし、実際に当団体が相談を受けた対象者で中国出身・ルーツをもつ人々は、仕事で来日した人が多かった。

当団体に寄せられている相談の大多数

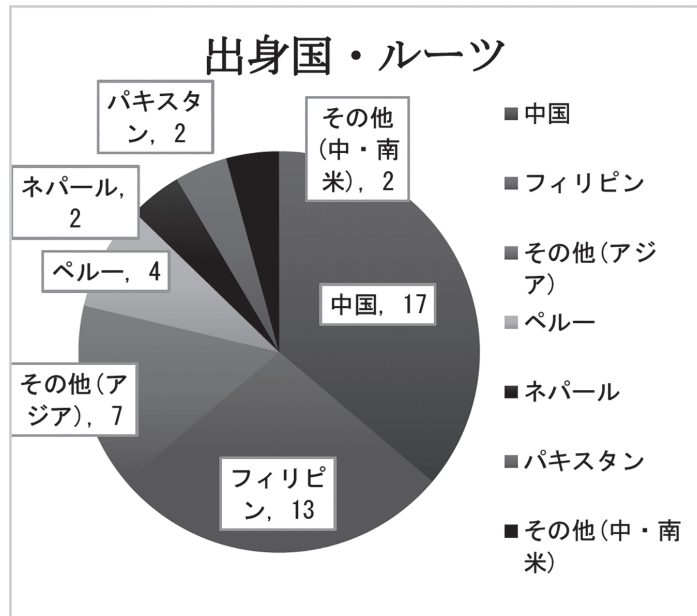
が学校関係・学習に関する問題であり、相談の対象者の多くが小学生、中学生、高校生であることのみならず、主に日本語学習を中心に活動している団体の特性も反映されているように思われる。学齢期の子どもたちを中心に学校関係・学習をめぐる様々な悩みはもちろん、

¹³ 埼玉県在留外国人数によると、2015 年末から 2016 年末までの一年間 12,830 人、2016 年末から 2017 年 6 月まで 7,540 人の外国人住民登録者数が増加しており、2016 年より外国人住民登録者が埼玉県内全人口の 2%を超えている状況である。

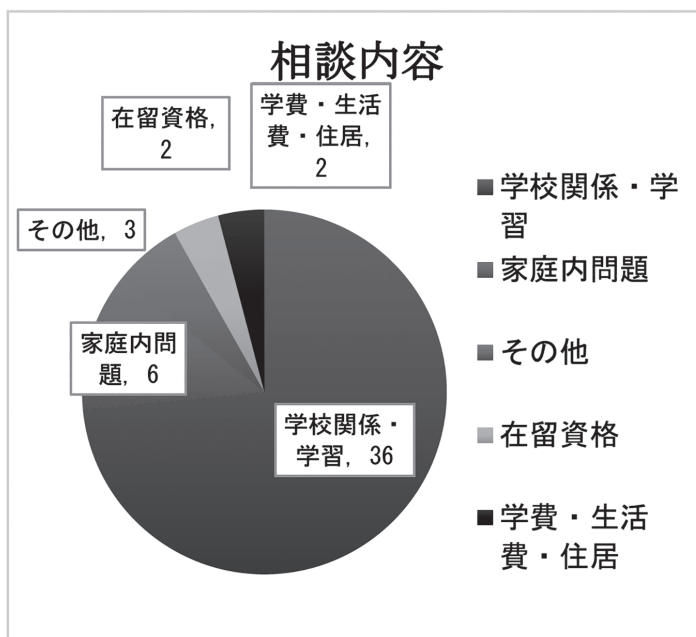
大人自身の日本語習得をはじめ、日本での生活に不安を持つ家族の相談が集まっていると思われる。

7. <多文化フリースクールちば>（千葉）

2017年度新たに広域連携の多文化家族相談データ調査に加わった「多文化フリースクールちば」では、2017年4月から2018年2月末まで49件の相談があった。相談対象者のルーツや構成も様々で、日本生まれ育ちのフィリピンルーツを持つ子どもはもちろん、アフリカのコンゴにつながる子どももいる。対象者は一人を



除く全員が千葉県内に住んでおり、ほぼ全員の相談に家族が同伴していることが注目できる¹⁴。また、全体49件の相談のうち、16件において通訳が入ったが、フィリピンルーツをもつ多文化家族の相談における通訳が6件で最も多く、次が中国で3件であった。千葉県全体とし

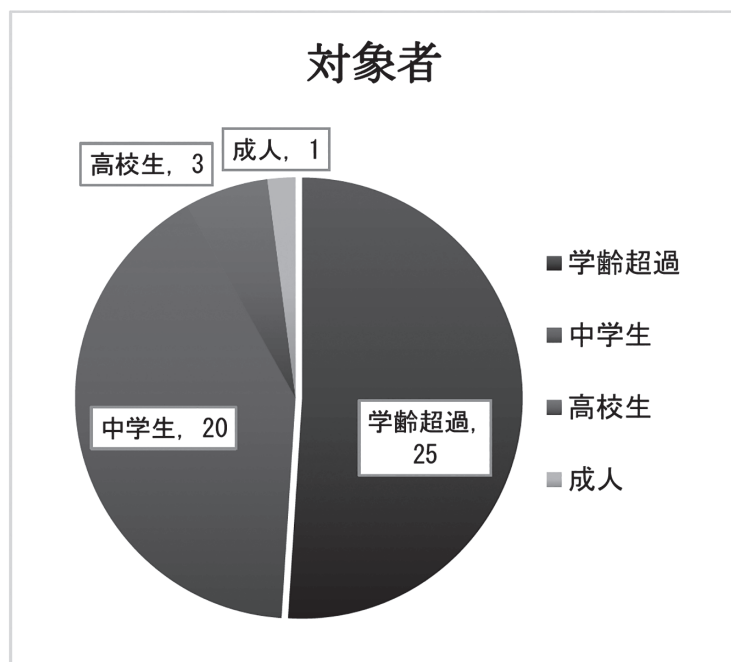


ては2016年12月末現在の住民登録上、120,232人の外国人住民がおり、そのうち中国が42,684人と最も多く、続いてフィリピン、韓国・朝鮮、ベトナム、タイ(上位5か国)の順になっている。

相談内容として最も多いのは学校関係・学習であり、相談対象者が学齢超過や中学生、高校生であるこ

¹⁴ 全体相談件数のうち、家族の同伴がなかった1件は、学齢超過の中国につながる子どものことであり、電話での対応だった。

とから考えると、日本語学習のみならず、学校の入学・編入等の手続きや学校教科への不安、



またとりわけ学齢超過の子どもが多いことから高校進学に向けた相談が多いと思われる。

以上、私たちの団体に寄せられた相談データを各団体別に概観し、多文化家族がそれぞれの地域において各団体にどのような相談を寄せているか、また相談の対象者の年齢層や出身・ルーツとどのように地域の特性が関係しているかを見てきた。どうしてもひとつの「大きい」問題として「大きく」まとめられるだけではなく、それぞれの地域の地域性によって相談の内容が異なってくることがある。しかし、一人ひとり、それぞれの多文化家族によって抱えている課題の背景や「問題」として認識するようになった経緯は異なるため、量的データでは見えないことを、より丁寧に確かめる必要があろうと思われる。

4. それぞれの教室を巣立った子どもたち

【ME-net】

名前：林郁芬（リン イクフォン）	来日時期：2010 年 6 月
出身・ルーツ：中国	在籍期間：2010 年 6 月～2011 年 2 月
現在：専門学校卒業後、理容師	
皆さん、こんにちは。最初に自己紹介をさせていただきます。私は林郁芬です。2010 年の 6 月に中国から来ました。もう 7 年半経ちます。私は理容師です。もう社会人になって 5 年経ちます。振り返ったら、時間はすごく早かった。たまにまだ学生の気持ちでいます。 専門学校の時は辛かったですけど、自分の夢と将来社会人になって痛い目に合うことにくらべたら、学生の時期の辛いのはなんともないです。そうは言っても、楽しい時もいっぱいありました。特にフリースクールの時、楽しかったです。私は弟と一緒に日本に来ました。来る前の考えが甘かったです。何も勉強しないまま日本に来て、話せないから、いろんな日本語学習教室に通いました。話せなくて、恥ずかしいと思い、行きたくない時もあったんですけど。日本で暮らしていくのに、話せないと、もっともっと恥ずかしい事、困る事がいっぱいあると思いました。先生達と友達の前で間違えより、知らない人の前で間違えた時もっと恥ずかしかったです。行かないといけなかったと思いました。 でもフリースクールで同じぐらいのお友達がいっぱい出来て、通うのも楽しくなりました。フリースクールの先生達も優しく、本当に自分の子どもみたいに一人一人の事を大事に考えてくれて、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。外国で暮らすのが、日本で本当に良かった。他の国でしたら、多分こんな所は無かったと思います。 今の職業に成るのもフリースクールの先生達のおかげでした。いろいろ調べていただいて、入学できるように教えていただきました。 この機会に先生達に「本当にありがとうございます」をお伝えしたいです。なかなか会いに行けませんが先生達も頑張ってください。大変だと思うけど外国から来て困っている子どもたちのためにフリースクールはずっとあって欲しいと思います。今になっても文章がうまく書けないけど、これは私の感謝の思いです。 これからの後輩達にも一言言います。「この楽しい年代でいっぱい楽しい思い出作りながら、将来の夢へ歩いていこう！ 私達一緒に後悔しないよう頑張りましょう」。	

名前：郎世勛（ロウ セイクン）	来日時期：2009 年 8 月
出身・ルーツ：中国	在籍期間：2009 年 9 月～2010 年 2 月
現在：大学卒業後、会社員	
皆さん、初めまして、郎世勛と申します。2009 年の 8 月、中国の吉林省からやって来ました。1992 年生まれで、今年、26 歳になりました。現在、株式会社ツツミワークスの社員です。 私が初めて日本に来たとき、日本語を全く話せませんでした。友人の紹介で、「たぶんかフリースクールよこはま」に入り、五十音図の勉強から始め、半年位の勉強を通して、県立湘南高校に入り、3 年で卒業後、関東学院大学建築・環境学部に入學しました。 建築学部を選んだ理由は、建築家一長谷川逸子さんの作品『PONT D'ISSY 周辺の再編成プロジェクト』をネットで初めて見た瞬間、人と自然の融合というデザインに惹かれて、「建築って芸術だな!」と思いました。ですので、最初は建築家に成りたくて、建築を学べる大学に進学しようと思い、情報収集を始めました。フリースクールの関口先生のおかげで、関東学院大学の建築学科が 2013 年より、工学部の中から独立し、建築・環境学部になる事が分かりました。また、関東学院大学の建築学科を卒業し、一級建築士の合格者数が全国 23 位（2013 年の情報）だった事と建築家一長谷川逸子さんが関東学院大学建築学科を卒業した事も分かりました。 試験は AO（自己推薦）入試で、当時は幾つかの物（正方体 2 個・球体 2 個・透明&半透明のコップ 1 個ずつ・紐 1 本及び A4 コピー用紙 1 枚）を自由に組み合わせて、スケールし、そして組み合わせた理由などについてプレゼンテーションをするという試験内容でした。 自分は建築設計を習う為に関東学院大学に入りましたが、数多くの課題を通して、他人とのセンスの差に気付いてしまい、自分の将来について再び考え始めました。将来は何をやりたいか、そして、建築業はどのような方向に発展するべきかを考えて、その為に、自分は何をすれば良いのか、何を身に付ければ良いのかを考えた上で、目標に向かって進んで行く決めました。 今の日本社会では少子高齢化に進んでいる事が多くの場面で分かっています、これにより、建築業にどのような影響があるのかを考えると、ニーズの変化だと思います。 日本は高度経済成長期を経て、数多くの建物が建てられました。しかしバブル崩壊後、日本経済が減速し、新築建物が殆ど建てられなくなりましたが、維持修繕を通して、建物を長寿命化する社会となって来ました。従って、建築業は新築ではなく、維持修繕の方向に進んで行くとは思っているのです、この業界に入りました。 中国の建物修繕工事はまだ日本の様に大規模ではなく、建替えが主流ですが、きっと維持修繕社会がやって来るだろうと自分は信じています。将来は、日本の理念と技術を中国に持ち帰って、ツツミワークスの中国支社を作りたいと思って、日々努力しています。 皆さんは今夢を持っていると思いますが、まだ迷っている方もいるでしょう。私が皆に伝えたい事は、まずは将来何をやりたいかを高校 3 年間を通して見つけて欲しい。そしてその方向に向かって、大学や専門学校に通うなどして、自分の基礎能力を立てる事です。最後に、自信を持ち、視野を広めて、進んで行ってください！ 応援します！ 加油！	

【ABC ジャパン】

名前：佐々木 聖壘（ササキ セイショウ）	来日時期：2011 年 3 月
出身・ルーツ：中国	在籍期間：2011 年 5 月～2012 年 3 月
現在：神奈川大学 2 年生	
私は 2011 年 3 月 8 日に中国から来日した。最初に来たとき、ひらがなの 50 音しか読めなかった。それなのに日本の高校に編入しようとしたが、問い合わせると、一定程度の日本語力がないとできないと言われた。母はあーすぶらぎで ABC ジャパンという日本語が勉強できる場所を知り、私はその年の 5 月から ABC ジャパンで勉強し始めた。 ABC ジャパンで勉強した毎日は楽しかった。先生たちがとても親切で、授業も分かりやすく説明してくれた。私が日本の戦国時代の歴史が好きだったので、渡部先生は戦国武将の絵を描いてくれたり、上杉謙信の携帯アクセサリを買ってくれたりした。横江先生の日本語授業も面白く、いつも丁寧に説明してもらった。富本先生からは英語を丁寧に教えてもらった。いつも笑顔で、とても親切なおじいさん先生だったと今でも思っている。坂巻先生の授業は週 1 回しかなかったが、会話がとても面白かった。授業以外にも学校見学や忘年会、卒業遠足などさまざまなイベントがあった。ABC ジャパンでの毎日はとても充実して過ごすことができた。一生忘れないと思う。そのおかげで日本語が上達し、神奈川県立鶴見総合高等学校に入学することができた。その後高校を卒業し、現在は神奈川大学に通っている。 今、大学で毎日頑張っている。去年から韓国語に興味を持つようになったので、一生懸命にハングルを勉強している。今年の 6 月、ハングル検定の 4 級を取った。これからも頑張りたいと思っている。卒業後は日本の貿易会社に勤めて、自分ができる中国語と日本語を活用したいと思っている。そして将来は、できれば県議会の議員か国会議員になりたい。 最初に日本に来たとき、私は「なぜ日本に行かなきゃいけないんだよ」と強く反発していた。そのとき日本という国は、私のイメージからするとあまり良い印象がなかった。もちろん日本人も全部悪いものだとして定義していた。しかし、日本に来て最初に会った日本人は ABC ジャパンの先生たちだった。先生たちと過ごすうちに、「日本人はそこまで悪くないね」と考えが少し変わっていった。そこから日本人への偏見が変わっていき、日本社会に溶け込むきっかけになった。これは私にとって非常に重要なことであり、その後の人生にも大きな影響を与えた。 先輩として、後輩に言いたいことは一つだけ、それは焦らないことである。面接のときであれ、勉強のときであれ、どんな場合も焦らないことが非常に重要である。しかし、「焦らない」は「ゆっくり」ではない。成功のためには努力が不可欠だが、努力したら絶対に成功とは限らない。心理的なストレスをできるだけ減らし、リラックスしていきましょう。まさに「人事を尽くして天命を待つ」であろう。	

名前：新垣愛花（アラカキ アイカ）	来日時期：2歳
出身・ルーツ：ボリビア	在籍期間：2011年5月～2013年3月
現在：駒澤大学2年生	
私がABCジャパンに通い始めたのは中学2年生の頃でした。1年近く学校へ行かずに家に引きこもっていた私に、担任の先生が紹介してくれたのがきっかけです。通い始めた当初は基礎が完全に抜けていたのでゼロからのスタートでしたが、先生方がとても熱心に、そして丁寧に教えてくださったおかげで、中学3年生に進級するタイミングから中学校に通うことができました。その後押しをしてくださったのもABCの方々です。 中学に通い始めてからも受検の勉強や面接練習、進路の相談などでABCジャパンにお世話になっていました。おかげで高校も合格することができて、ゼロからのスタートだった勉強がここまで伸びるとは思っていなかったのも本当にABCの方々には感謝しています。 勉強面では大変お世話になりましたが、他愛もない会話もとても楽しかったのを覚えています。私は人見知りをしてしまう性格だったので、最初は言葉を発することも少なかったのですが、ABCには沢山の方々が訪れるので自然と人見知りをしなくなりました。人見知りをしなくなったことに私自身とても驚きましたが、当初の私を知っている家族や先生方が一番驚いたのではないかと思います。他にも遠足で秋葉原へ行ったり、スカイツリーを見に行ったりとたくさんの思い出ができました。 私は今、大学に通って法律を学んでいます。将来はABCジャパンで教わったことや経験を活かしながら大学で学んだことも活かせる職に就きたいと考えています。 これからABCで勉強する方は、きっと新しい環境で不安だと思いますが、ABCの先生方はひとりひとりに寄り添って、いつもきちんと向き合ってくれます。そんな素敵な先生方のサポートを受けながら、自らの努力も怠らずに頑張りたいと思います。私はABCジャパンを卒業しましたが、卒業生として私も何か力になれたらなと思います。	

【青丘社】

名前：モレリア・ジェイド・クリスタル	来日時期：2014 年 10 月
出身・ルーツ：フィリピン	在籍期間：2014 年 10 月～2015 年 3 月
現在：県立横浜翠嵐高校 3 年生、上智大学短期大学部英語学科（2018 年 4 月入学予定）	
2014 年 10 月 2 日フィリピンから日本に来ました。それまで日本語を学んだことはありませんでした。母が以前日本に来たとき、川崎市ふれあい館の日本語教室に通っていました。そこで、日本語を学ぼうと、母に連れられてふれあい館に行きました。すると、多賀先生に高校に進学することと、そのために学習サポート教室で学ぶことを勧められました。 学習サポート教室では、火・木・金曜日の 10 時半から 16 時半までと、土曜日の 13 時から 15 時まで学習しました。日本語を中心に、高校受検に必要な数学や英語も学びました。はじめての学習サポート教室は、川崎駅前の東芝科学館への見学会でした。日本の技術を知ることが出来て、楽しかったです。 学習サポートの学習は、日本語のひらがなとカタカナの勉強から始まりました。そして、「おはようございます」などの挨拶、読み方の勉強、そして漢字は小学 1 年生から勉強しました。たまたま数学の勉強もしました。すぐに、受検の面接の練習も始まりましたが、日本語で質問されても何も分からなくて大変でした。答えは、最初英語で書いて、先生に翻訳してもらいました。そして、全部丸覚えしました。学習サポートでの毎日は、短い間でも楽しかったです。教室の最後の日は悲しかったです。 多賀先生は面白くて、明るくて、お父さんかおじいさんのような存在でした。先生たちはみんな優しく勉強を教えてくださいました。また、新しい友達ができました。言葉は違っても、楽しかったです。ブラジルから来たミリアンや、フィリピン出身のマイケル、中国出身の笠原、ツアン・ホー、ムーティンなど。みんなで桜本フェスタ（＊地域の音楽イベント）に出演し、韓国の音楽にのせてグループで踊りました。多賀先生や原先生も一緒に踊ってくれました。また、フィリピン人スタッフのマリーさんに教えていただきティニクリン（＊フィリピンのバンブーダンス）も演じました。その後、横浜翠嵐高校定時制に無事合格し、さらに学習を進めることができました。3 年間で卒業することができます。卒業後は、高校からの推薦で合格した上智大学短期大学部英文科に進学します。 学習サポート教室の支援が無かったら、ここまでの私はありませんでした。全部一から教えてくれました。本当にありがとうございました。	

名前：代 唯斯（ダイ ウェイス）	来日時期：2010 年 12 月
出身・ルーツ：中国	在籍期間：2011 年 5 月～2012 年 3 月
現在：中華レストラン経営計画中	
私は 2010 年 12 月に中国から日本に来ました。お父さんは 2002 年に日本に来ていて、家族みんなと一緒に暮らすためにお母さんと来ました。最初来たばかりの時は、日本語ができなく、食べ物や日本の生活に全く慣れられなくて、何度も中国に帰ろうと思いました。四川出身の私にとって薄味の日本料理は全く合わなかったです。約 2 ヶ月間精神的に辛かったです。色々と考えて、せっかく日本に来たから、じゃあ大学には入ろうかと自分に言いました。色々調べ始めたら日本の大学に入るのそんなに簡単なことじゃなかったです。大学に入るには高校卒業証明書が必要でしたが、2008 年に四川大地震があったため私は高校に入れませんでした。仕方なく、高校に入って卒業してから大学に入ることにしました。 お父さんの友人と一緒に総合教育センターに行きました。そこで夜間学級と学習サポートを紹介してもらいました。夜間学級で勉強しながら高校に入るために学習サポートで日本語、数学、英語を勉強しました。フィリピン出身のレイコと一緒に教室で勉強しましたが、お互い日本語ができず、また彼は英語が上手でしたが、私は全然出来なかったです。私たち二人の交流は絵と単語などでなんとか頑張っていました。 一年後、サポート教室の先生たちが手伝ってくれて無事に相模原青陵高校に入りました。川崎から遠かったですが、自分の夢に一步近づくようになって本当に嬉しかったです。 しかし、3 年間の高校生活が終わった私は大学に憧れることを辞めました。学生として生活するのは私にとってとても縛られるようなことだったからです。それよりも社会を経験した方が自分にとって良いと思いました。そのため、とりあえずお父さんの仕事を手伝うことにして、ある程度経験を積んで自分の新しい夢を描くことにしました。元々私の家族は三代とも料理人ということもあるので、「だからこそ料理人になれ」と親から言われました。しかし、私は料理人よりも、経営者になりたいです。もちろん簡単に経営者にはなれないので、今まで頑張ってきたこととこれからの経験することをすべて活かして、自分の人生が輝くまで努力したいと思います。 この道を選んだ私は戻ることはない、進むしかない。私は成功するしかない。いずれ、その結果をもって、親切に教えてくれた先生の前に、先生の努力は無駄ではありませんでしたと伝えるべきです。 人生はいろいろあるはず。そのため、自分で自分に合うことを見つけることは難しいですが、努力しているかどうか、本当にそう思っているかどうか、自分は続けることができるかどうかと自分に先に聞くべきです。失敗は怖くない。怖いのは失敗したらそこからまた立ち上がることができないことです。	

多文化家族支援 外国につながる子ども白書

発行日：2018 年 3 月 31 日

発行者：NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ

住 所：〒 247-0007 神奈川県横浜市栄区小菅ヶ谷 1-2-1
地球市民かながわプラザ NPO などのための事務室内
TEL・FAX / 045-896-0015

協 力：NPO 法人 ABC ジャパン 社会福祉法人青丘社

認定 NPO 法人茨城 NPO センター・コモンズ

NPO 法人フィリピンナガイサ 多文化子ども支援連絡会

多文化共生教育研究会 房総日本語ボランティアネットワーク

執 筆：安富祖 美智江 井草 まさ子 王 暁音 川辺 明美 高橋 清樹

原 千代子 黄 浩貞 藪崎 千鶴子 渡辺 裕美子（五十音順）

デザイン：スタジオクッカバラ

多文化家族支援
外国につながる子ども白書